

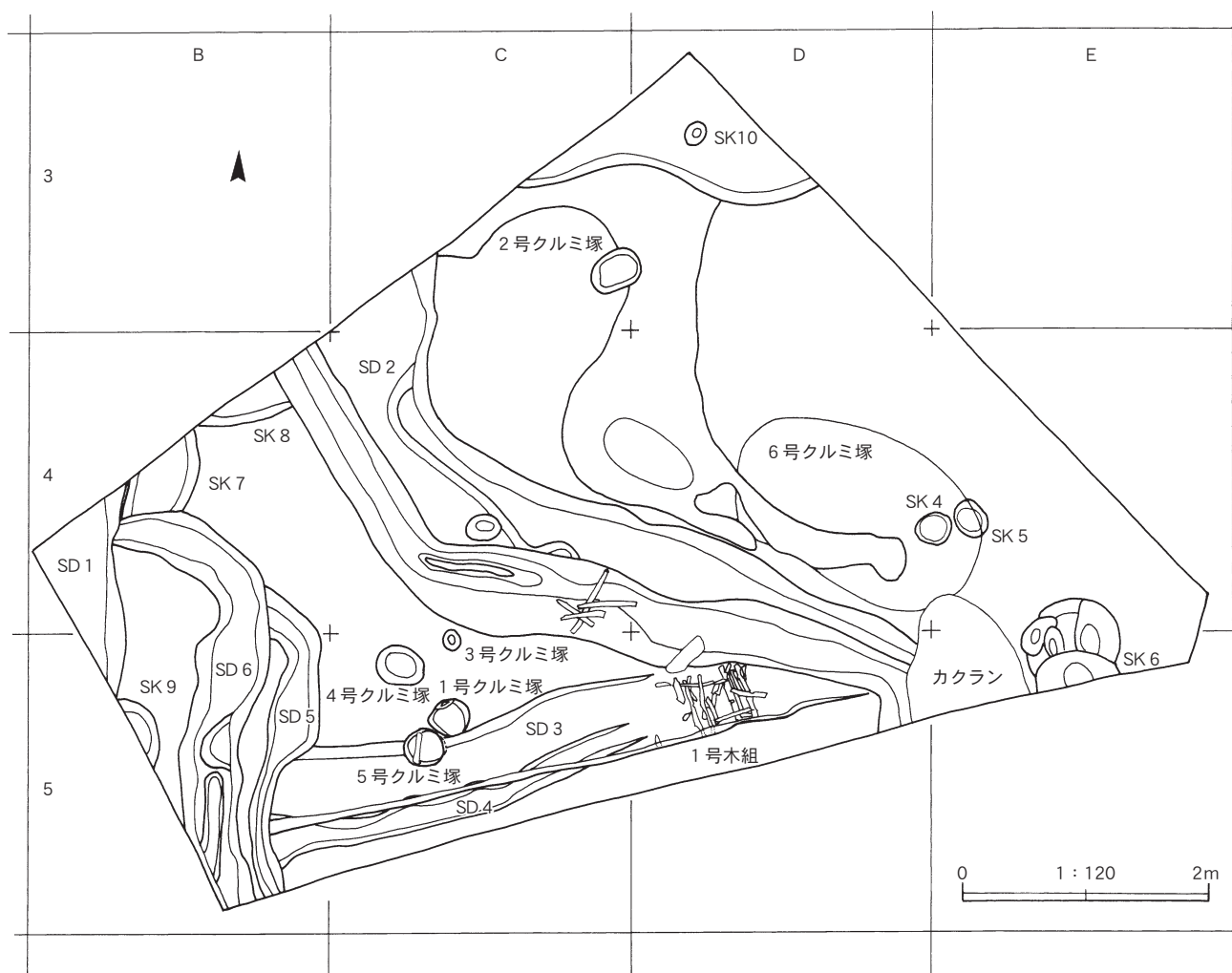
第IV章 低地の調査（第4次調査）

第1節 調査の概要

第4次調査区は遺跡の北部に位置し、台地直下の低地が対象である。原状は都市再生機構（UR）の遊水地として機能しているエリアで、面積は170㎡である。調査に際しては重機で表土を除去し、調査区の周囲に排水溝を掘削した後、ポンプで揚水しながら遺物包含層及び遺構を掘り下げ、粘土質の基盤層まで調査を行った。調査区のほぼ全面には黒褐色泥質層（Ⅰ層）が覆っており、以下、茶褐色泥炭質層（Ⅱa・Ⅱb層）、灰褐色砂層（Ⅲ層）、基盤層である黒褐色粘土質層（Ⅳ層）、青灰褐色粘土質層（Ⅴ層）と堆積している。このうち、縄文時代中期の生活面はⅡa層～Ⅲ層まで、約30～40cmの厚みを有する層位である。

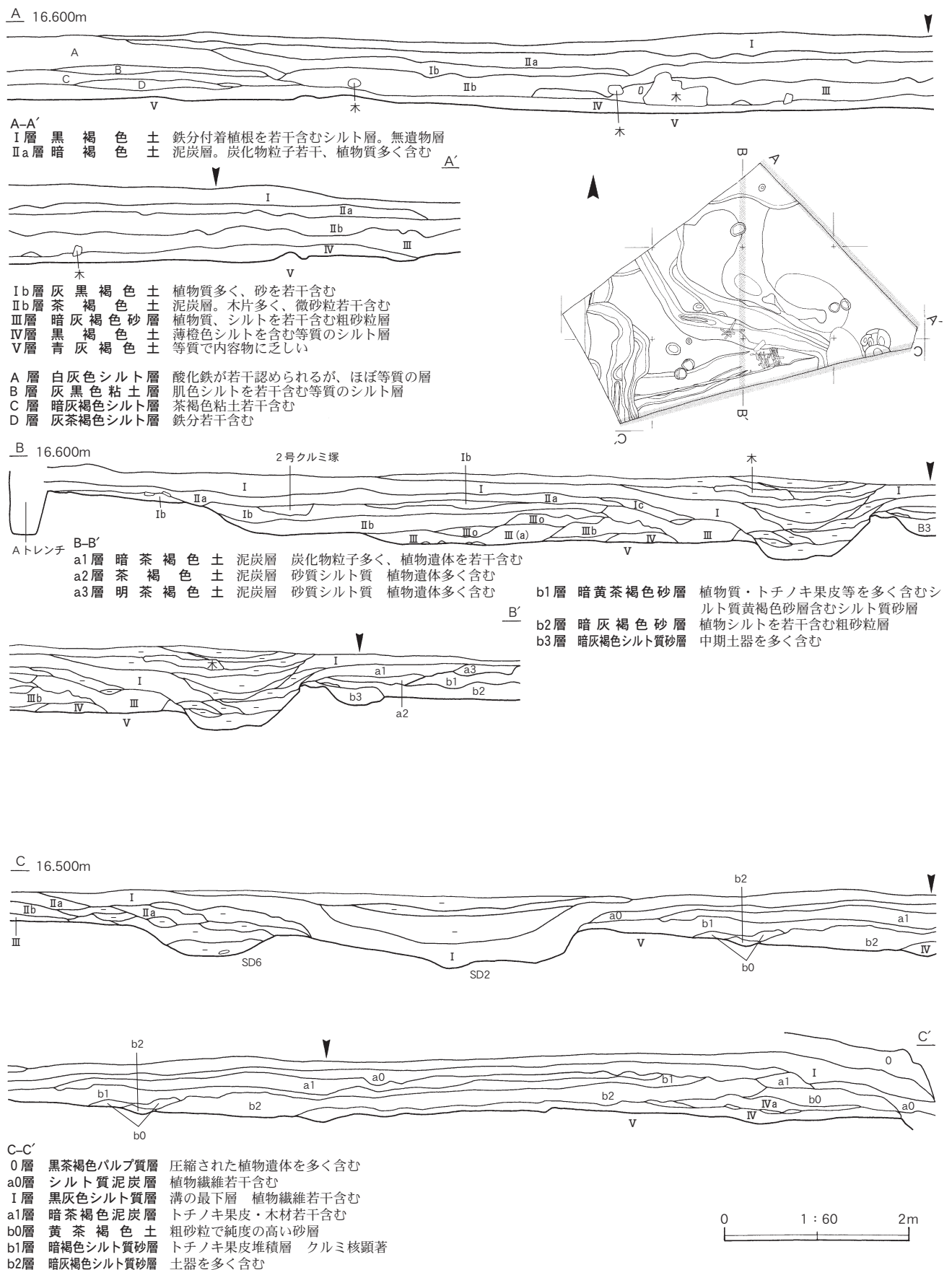
調査区はデーノタメから流れ出した流路の一部と想定され、この窪地を中心に縄文時代中期中葉から後葉のⅡa～Ⅲ層が堆積し、クルミ塚、砂道跡、溝跡等の遺構のほか、各層位から漆塗土器を含む土器類が多量に出土している。また、調査区南部の支流部分では、主として縄文時代後期前葉の泥炭層等が堆積し、溝跡、木組遺構、土坑、トチ塚等が分布する（第191図）。なお、調査区中央部をクランク状に走る2号溝跡は上記の泥炭層を掘削しており、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される。

また、調査の基本層序は第192図に示した。



第191図 第4次調査区全体図

第IV章 低地の調査（第4次調査）



第192図 第4次調査区基本層序

第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) クルミ塚

クルミ塚は縄文時代中期の遺構として最も顕著な遺構で、1～6号の6基が検出された。分布は調査区南部のC5グリッドに4基が集中するほか、北部のC3グリッドに1基、東部のD4グリッドに1基が分布する。形態は長径40～70cmと小規模で皿形または円筒形に掘り込むもの、あるいは長径4mを超えるものがある。いずれも人為的にオニグルミ核を主体として廃棄しており、他に土器類や微細な植物遺体を含んでいる。なお、第195図にオニグルミ核の分布状況を示した。

1号クルミ塚 (第193図)

C5グリッドに位置する。3号溝跡に南部を切られる。平面形は円形を呈するが、北端に楕円形の小ピットが穿たれる。規模は長径70cm、短径65cmで、深さは8cmと浅く、皿形に掘り込まれている。主軸はN－12°－Wを指向する。覆土は砂質の暗茶褐色土を主体に堆積し、オニグルミ核を137点包含していた。出土土器は加曾利EⅠ式を主体としているが、オニグルミ核の年代測定の結果では加曾利EⅢ式期であった。

2号クルミ塚 (第193図)

C3グリッドに位置する。重複する砂道跡とは時期が同じである。平面形は北側でやや括れるが概ね楕円形を呈する。基本層序のⅡa層からⅠa層中に掘り込んでおり、規模は長径90cm、短径65cm、深さは8cmと浅く、断面形は皿形である。主軸はN－89°－Eを指向する。覆土はクルミ核、自然木片を多く含む黒褐色土を主体とする。オニグルミ核は262点が包含されており、砂道跡と接する北側から廃棄行為が行われたような堆積状況が観察された。出土土器は勝坂Ⅲ式期の小型鉢形土器のほか、匙と想定される木胎漆器片等が出土している。オニグルミ核の年代測定では加曾利EⅡ式期という結果であった。

3号クルミ塚 (第193図)

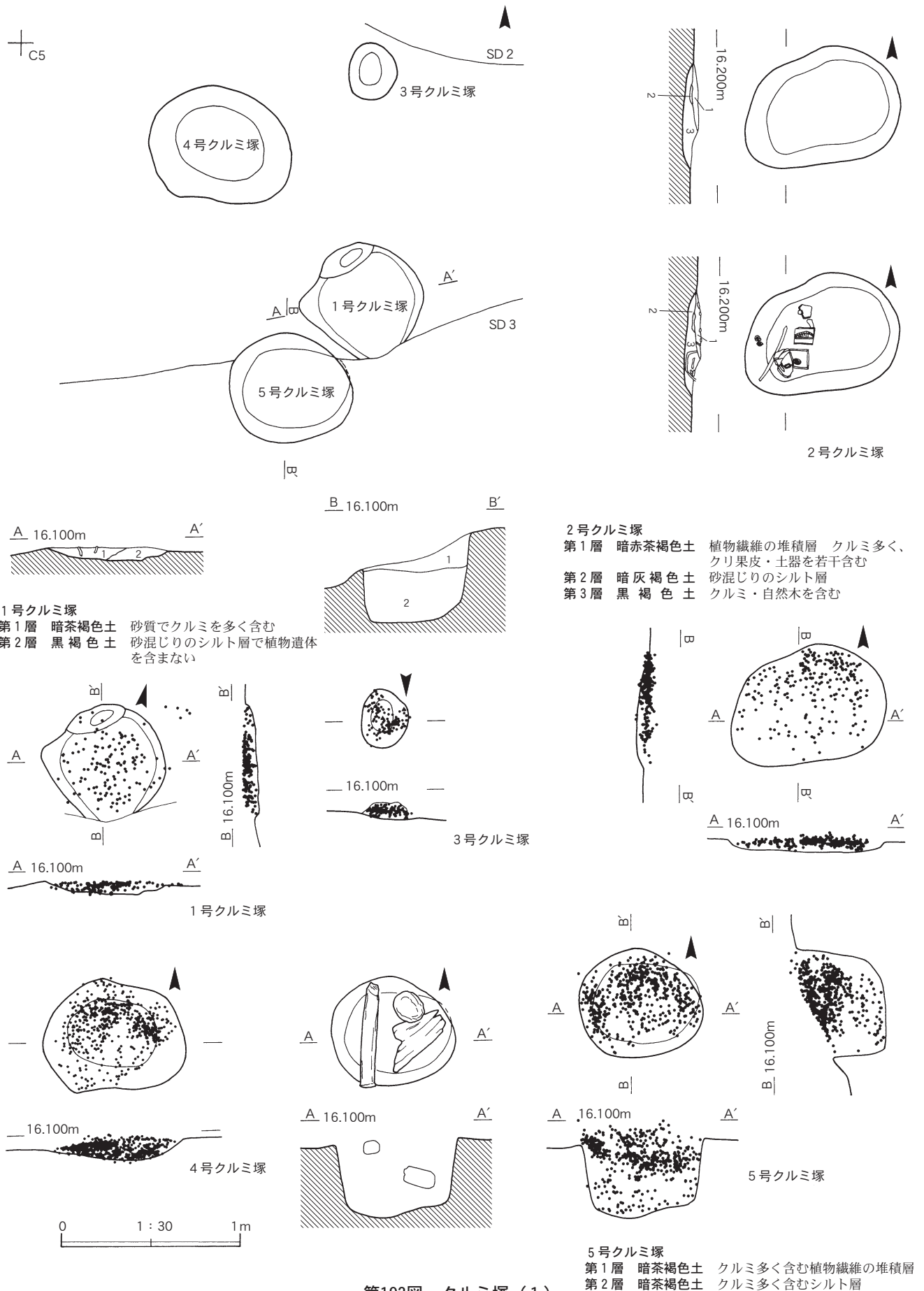
C5グリッドに位置し、4号クルミ塚とは至近である。平面形は楕円形を呈し、長径40cm、短径25cmとクルミ塚の中で最も小規模である。明確な掘り込みはなく、クルミ核を凸状に約10cm盛り上げた状態で堆積する。ただし、クルミ集中下は若干窪んでいる。主軸はほぼ磁北を指向する。オニグルミ核は109点出土した。土器等の出土はなかった。オニグルミ核の年代測定では加曾利EⅢ式期という結果であった。

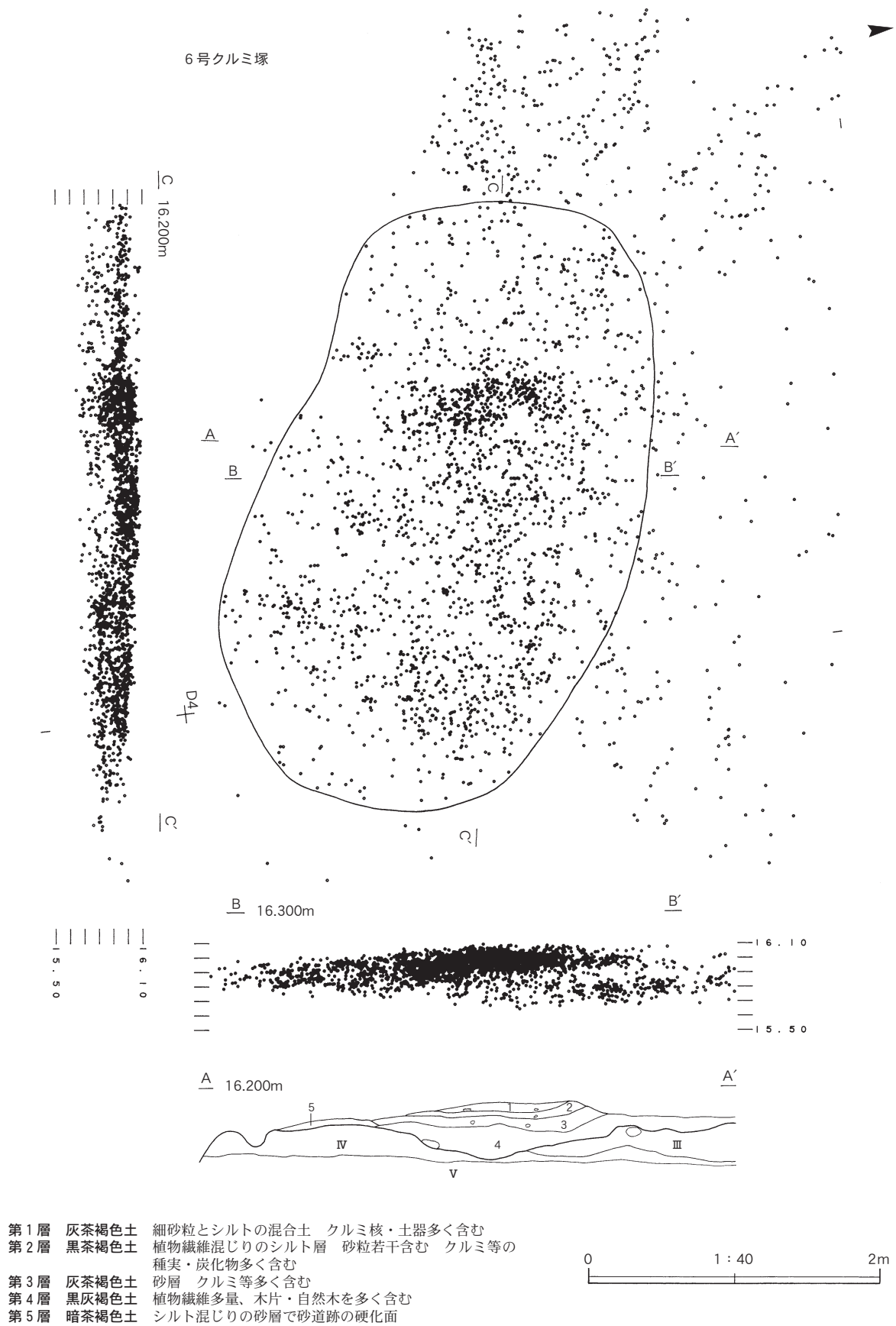
4号クルミ塚 (第193図)

C5グリッドに位置する。1・3・5号クルミ塚とは至近である。規模は長径81cm、短径62cm、深さは12cmであり、皿状に掘り込まれる。平面形はやや南北が窪む楕円形を呈し、主軸は北側に向かい東西方向にほぼ90°である。クルミ核は北側に分布が濃く、廃棄行為の行われた状況がうかがえる。オニグルミ核を553点包含していたが、土器等の遺物出土はなかった。オニグルミ核の年代測定では加曾利EⅢ式期という結果であった。

5号クルミ塚 (第193図)

C5グリッドに位置する。3号溝跡に上半部を切られている。規模は長径70cm、短径62cmで平面形は円形のプランを呈する。円筒形に掘り込まれ、深さは38cmを測る。主軸はほぼ磁北を指向する。覆土は上下2層





第194図 クルミ塚（2）

に分けられ、上層は木材等を多く含む。クルミ核は472点が出土し、位置は上層部に偏在しており、下層では疎となる。本来は貯蔵穴としての機能を有していたと想定され、埋没過程において廃棄遺構として使用されたと考えられる。覆土中から漆塗土器が5点検出されている。土器の主体は加曾利 E I 式であるが、オニグルミ核の年代測定の結果は加曾利 E III 式期であった。また、覆土上層から椀状木製品の未成品及び杭等が検出されている。

6号クルミ塚（第194図）

D4・E4グリッドに広がって位置しており、砂道跡の北側に接している。クルミ塚は基盤層であるIV層を掘込んでおり、規模は長径が4.35m、短径は2.6mの規模である。主軸はN-61°-Wを指向する。平面のプランは楕円形を呈し、レンズ状に盛り上がって堆積する。ただし、クルミ塚周辺にもクルミ核は広範に分布しており、遺構の境界を明確に特定することは困難であった。クルミ核の堆積は概ね40cmの厚さで堆積する。中央部の堆積層は4層に分けられ、年代測定では最下層の4層は縄文時代中期中葉、最上層の1層では中期後葉という結果であった。堆積層中には土器類の出土が多く、北西部からはクルミ形土製品が出土しており注目される。出土土器の主体は勝坂Ⅲ式である。

1号クルミ塚出土土器（第196図1～6）

1、2は阿玉台式土器である。1は断面三角形の隆帯に沿って角押文が施され、有節沈線が充填される。2は断面三角形の隆帯がやや弧状である。3・4は加曾利 E 式の頸部片で、3は口縁部文様帯に沈線文が



第195図 クルミ核の分布状況

描かれる。5は胴部の地文でRLの単節縄文である。6は浅鉢形土器の口縁部である。口唇部が内側へ突出し底状である。

2号クルミ塚出土土器（第196図7～13）

7は勝坂Ⅲ式の鉢形土器である。底部から内湾するように立ち上がり、口縁部は肥厚してわずかに内屈する器形である。口唇直下は無文帯が横走し、刻みを有する隆帯が連弧状に器面を展開する。隆帯により半円形の区画文となった文様帯は5単位廻るが、正面は対向する渦巻文が描かれ、右回りで三叉文、入り組み文、三叉文と三角形の区画文、交互沈線による充填文とモチーフは全て異なる。口径は15.5cm、高さは14.5cmである。胎土には細礫が含まれる。内外面の色調は暗茶褐色で焼成は良好である。

8は勝坂Ⅲ式土器である。口唇部直下に交互刺突文を施す。正面の円文は内部を集合沈線で充填し、刻みをもつ隆帯がこれに沿う。隆帯は横位に展開して区画文を形成する。区画内部は三叉文、集合沈線を施す。復元口径は18.5cmである。

9は深鉢形土器の小突起部である。周縁に刻みを施す。表裏にモチーフがあり、正面は刻みに縁どられた三叉文を充填する。10は刻みを有する渦巻文を描く。11は斜位の隆帯による区画文を描く。12は深鉢形土器の無文帯であろう。

13は加曾利EⅠ式の頸部付近である。横位の撚糸文が口縁部文様帯の地文である。

4号クルミ塚出土土器（第196図14）

14は阿玉台式土器で、有節沈線による弧状の文様と隆帯沿いに沈線を描く。

5号クルミ塚出土土器（第196図15～17）

15、16は加曾利EⅠ式土器である。いずれも胴部片で15は蛇行沈線、16は半裁竹管による蛇行沈線を懸垂文としてそれぞれ描く。17は微隆帯に沿って磨り消される。加曾利EⅢ式である。

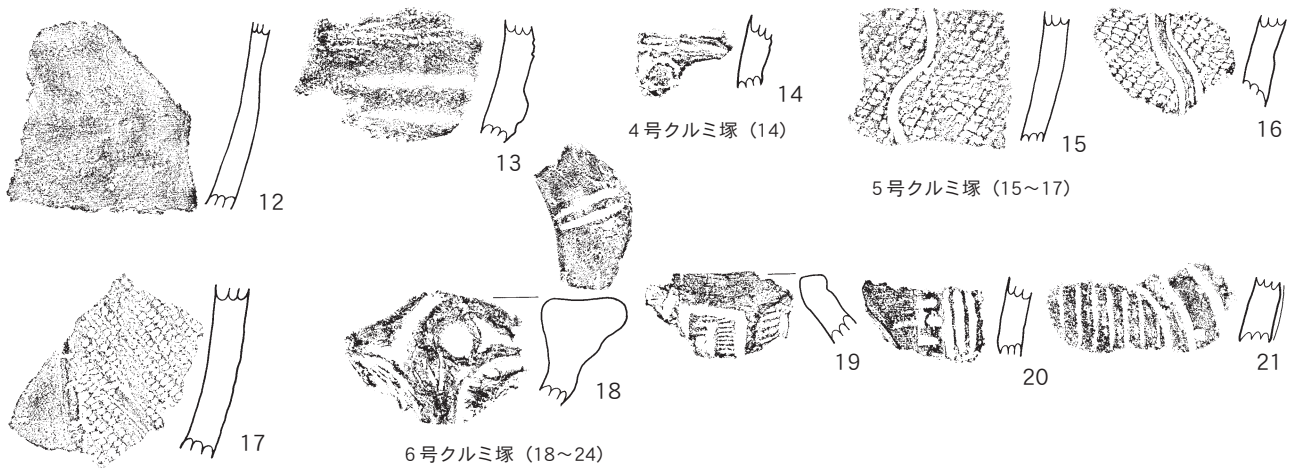
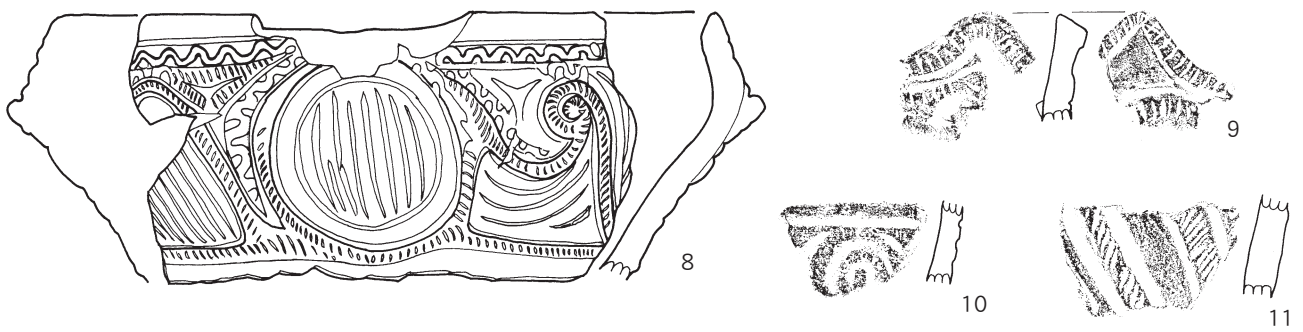
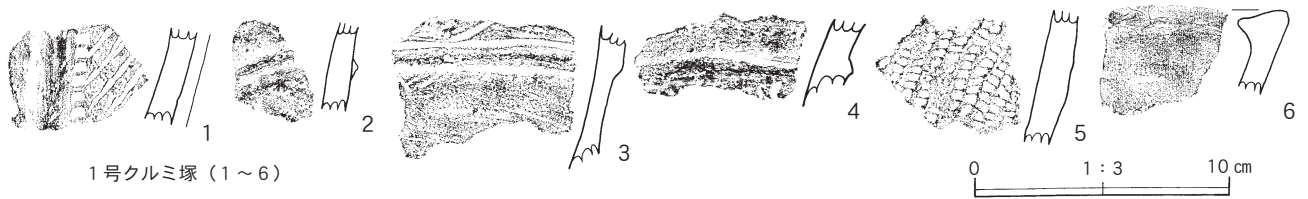
6号クルミ塚出土土器（第196図18～24）

18は波状口縁の波頂部である。小突起状で、口唇直下には隆帯による円文が右向きに貼付され、隆帯が垂下する。口唇部には短沈線を描く。19は瓢形を呈する土器の口縁部である。器面には縦位の区画文が描かれると想定される。20は円筒形を呈する深鉢形土器で、縦位の隆帯には交互短沈線が施され、区画文を構成すると想定される。21は弧状の区画文で集合沈線を充填する。これらは勝坂Ⅲ式である。

22、23は阿玉台式土器で、22は縦位の隆帯に沿って有節沈線を施す。23は横位の隆帯の上下に条線による波状のモチーフを描く。24は平行する4列の沈線が口唇部直下に廻り、下方から描かれるモチーフが貫入する。前期の関山式であろう。

（2）土坑

土坑は調査開始段階で9基を想定したが、その後、掘り込み等が確認されないものを除き6基を調査対象とした。このため1～3号土坑は欠番とする。いずれも掘り込みは浅く、基盤層を掘削している遺構は少ない。遺構の帰属時期については6号土坑が縄文時代後期前葉で、その他は縄文中期後葉～後期初頭に比定される。



第196図 クルミ塚出土土器

4号土坑（第197図、第37表）

D4グリッドに位置し、5号土坑とは近接して構築されていた。規模は長径1.1m、短径1.08mの規模で、深さはおよそ7cmと浅く、平面形は円形を呈する。主軸はN-77°-Wを指向する。床面は平坦で壁の立ち上がりは急である。遺構中には自然木が流れ込んでおり、このうちの1点はウルシ材（第269図30）で、年代測定の結果は縄文後期初頭であった。出土遺物は阿玉台式土器が卓越する。

5号土坑（第197図、第37表）

D4・E4グリッドにまたがって位置し、4号土坑の東側に近接する。遺構の北部は攪乱によって壊されている。長径1.3m、短径1.06mの規模で、深さは6cm程度と浅い。平面は楕円形を呈する。N-41°-Wを指向する。掘り込みは皿状で、床面には自然木が堆積し、土器等の遺物は検出されなかった。

6号土坑（第197図、第37表）

E5グリッド付近に位置する。遺構の主体は調査区の南側に延びている。平面のプランは楕円形ないし円形と推定され、調査区南壁のセクション観察では長径1.6m、深さ0.4mで浅い擂鉢状の形態である。主軸はN-8°-Eを指向する。出土遺物は縄文後期の堀之内式土器を主体としている。また覆土の第1層から骨片のほか、オニグルミ核、トチノキ種皮、ナラガシワ等の植物遺体が検出されている。最下層の3層から出土した炭化ダイズ属の年代測定では、堀之内I式期という結果であった。

7号土坑（第200図、第37表）

B4グリッドに位置する。北側は調査区外に延びており、南側は6号溝跡に切られている。平面形は長楕円形を呈すると想定される。調査範囲では長径1.2m、短径1.1m、深さは0.13mである。遺物の出土はなかった。主軸はN-8°-Eを指向する。

8号土坑（第200図、第37表）

B4グリッドに位置する。東側を2号溝に切られ、北側は調査区へ延びている。平面形は長楕円形を呈すると想定され、規模は調査範囲で長径1.5m、短径0.5m、深さは0.13mである。主軸はN-74°-Eを指向する。時期を決定する遺物は少ない。

9号土坑（第200図、第37表）

B5グリッドに位置する。1号溝に北端の一部を切られ、西側は調査区外へ延びている。平面形は楕円形を呈すると思われる。長径1.2m、短径0.43m、深さ0.14mである。主軸はN-15°-Wを指向すると想定される。遺物の出土は少ない。

10号土坑（第197図、第37表）

D3グリッドに位置する。平面のプランは円形である。規模は長径0.8m、短径0.72m、深さ0.12mで浅い擂鉢状の形態である。主軸はN-5°-Eを指向する。集落と対岸の粘土層の高まりから検出された。出土遺物は縄文中期の漆塗土器が底部から検出されている。

4号土坑出土土器（第198図1～24）

1は黒浜式土器の口縁部片である。口唇直下は帯状に地文を磨り消している。2は浮島Ⅰ式土器である。微隆帯上に矢羽状の刻みを加えている。

3は三角押文による横位と斜位のモチーフを密に施している。波状口縁であろう。勝坂Ⅱ式である。4は円筒状を呈する土器の口縁部である。口唇部は肥厚し、刻みを施す。5は矢羽状の刻みを加えた隆帯が胴部と頸部を区画し、楕円形の貼付文が垂下する。6は刻みを有する隆帯が方形の区画文を構成する。

7～16は阿玉台式土器である。7は楕円形区画文の結節点に押圧を加え、隆帯に沿って有節沈線を施す。8は扇状の突起部で、端部に刻みを施す。波頂部から隆帯が垂下し、有節沈線を施す。これらはⅠb式である。

9は角押文により楕円形区画文を描く。口唇部には刻みが加えられる。10は口唇部が外側へ突出し、庇状である。横位に角押文、有節沈線が廻る。11は横位の隆帯に沿って複列の角押文を施す。これらは勝坂Ⅱ式である。

12は隆帯に沿って幅広の爪形文を施す。勝坂Ⅲ式である。13は襷状の押圧と蛇行隆帯を施す阿玉台Ⅰb式土器である。14は縦位の隆帯に沿って複列の沈線が垂下する。15は横位の沈線文である。勝坂Ⅱ式であろう。16は胴部片で蛇行する隆帯を施す。阿玉台Ⅰb式である。

17は加曾利ⅠE式の口縁部片で、渦巻文が上位隆帯から派生する。18は胴部片で撚糸文が地文となる。19、20は浅鉢形土器である。19は口唇部が内側へ突出する。20は口縁部に最大径をもつ。21は加曾利ⅠEⅣ式の両耳壺の口縁部であろう。

22は加曾利ⅠEⅢ式の深鉢形土器で、微隆帯による区画文から条線による懸垂文を描く。

23、24は称名寺Ⅱ式の胴部片で、平行沈線による弧状の文様を描く。

6号土坑出土土器（第198図25～41）

25、26は諸磯c式の土器である。25は横位に浮線文を施す。27は加曾利ⅠE式の土器片である。深鉢形土器の頸部付近であろう。28は蛇行隆帯を描く。29は胴部に沈線による長楕円形のモチーフを直交させて描く。

30～33は沈線による懸垂文である。沈線間は地文を磨り消している。32は弧状の条線を充填する。33はRLの単節縄文が地文である。

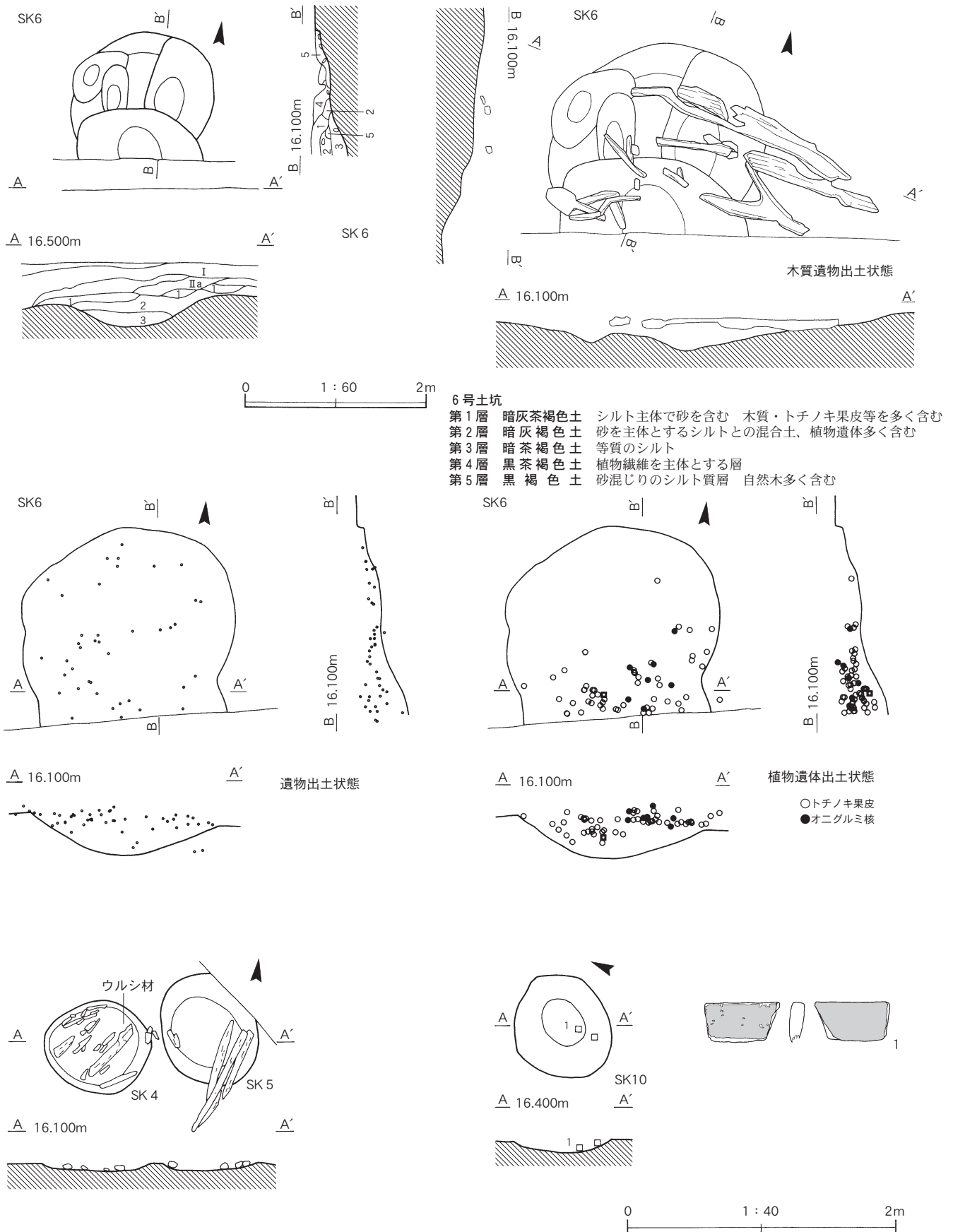
34は称名寺Ⅱ式の土器である。モチーフ間に列点を施す。

35は堀之内Ⅱ式の精製土器で、口唇直下に刻みを有して隆帯が廻る。36は深鉢形土器の屈曲部から沈線文が垂下する。37、38は粗製土器の胴部片である。沈線あるいは条線によりモチーフを描く。

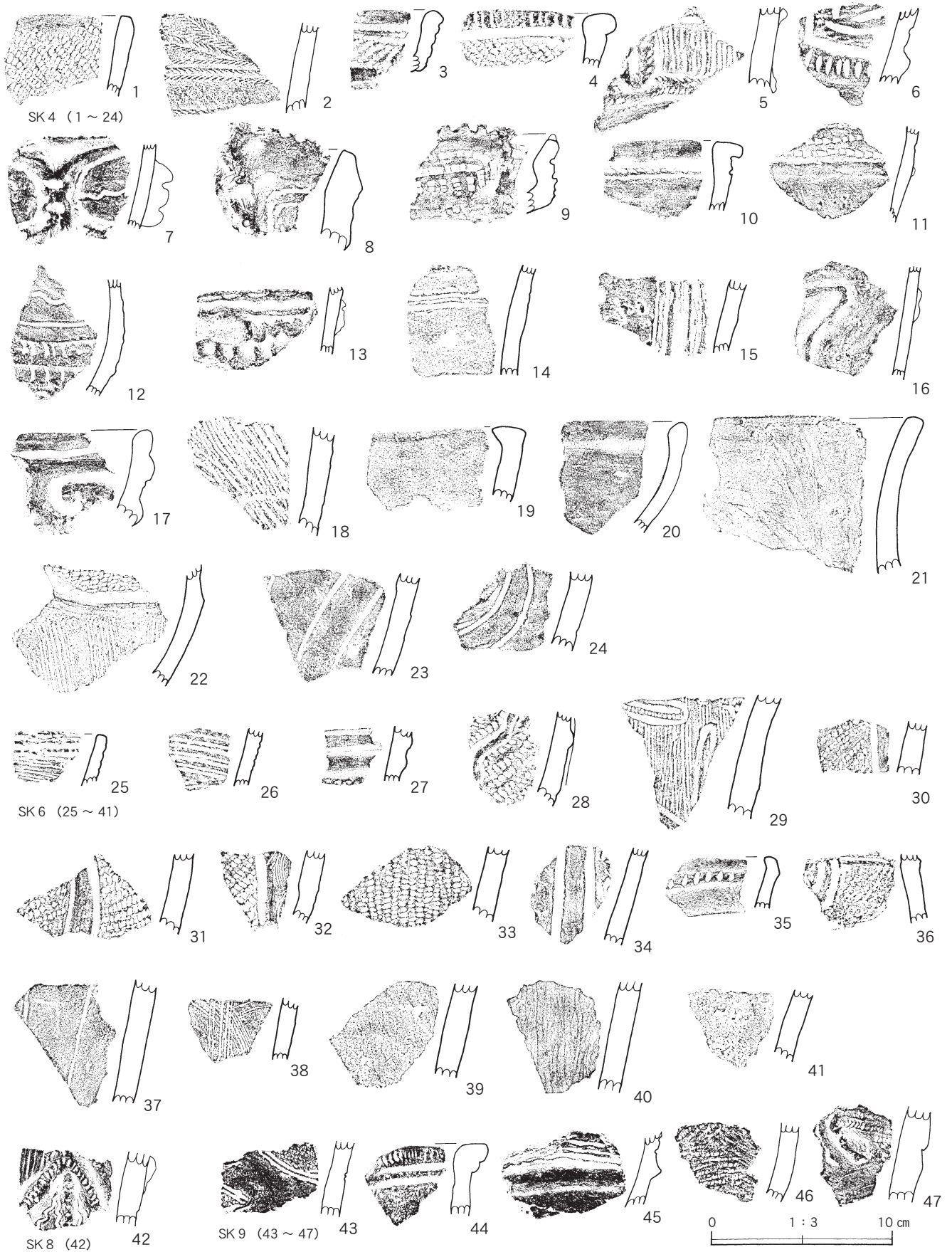
39～41は縄文後期の胴部片である。

第37表 土坑計測表

遺構名	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主軸	形態	備考
4号土坑	D4	110	108	7	N-77°-W	円形	ウルシ材出土
5号土坑	D4・E4	130	106	6	N-64°-W	楕円形	
6号土坑	E5	160	140	40	N-8°-W	楕円形	炭化ダイズ出土
7号土坑	B4	120	110	13	N-8°-W	楕円形	
8号土坑	B4	150	50	13	N-74°-E	楕円形	
9号土坑	B5	120	43	14	N-15°-E	楕円形	
10号土坑	C3	80	72	12	N-5°-E	円形	



第197図 4～6・10号土坑



第198図 土坑出土土器

8号土坑出土土器（第198図42）

42は勝坂Ⅲ式の土器である。三角形の隆帯頂部から小波状の沈線と刻みを有する隆帯が垂下する。

9号土坑出土土器（第198図43～47）

43は前期の諸磯a式である。横位に木葉文が施される。44は勝坂Ⅲ式の土器で円筒形を呈する。口唇部が肥厚し、爪形文が施される。45は阿玉台Ⅱ式の土器で、隆帯に沿って複数列の小波状の沈線が施される。46、47は胎土に雲母片が含まれ、ともに縄文を施している。阿玉台Ⅳ式であろう。

（3）溝跡

溝跡は調査開始後に1～9号の遺構番号を付した。このうち1・2号溝跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構であり、7～9号溝跡は調査過程で土坑と判断された。このため縄文時代と判断した遺構は3～6号溝跡である。以下各遺構について記述する。

3号溝跡（第199図）

調査区南部のC5・D5グリッドに位置し、幅2.7m、深さ0.2m、長さ10.5mの規模で、東端は2号溝跡に切られる。同グリッドの南部は西から東に流れる支流部で、基盤の粘土層（V層またはⅣ層）上には暗褐色砂層（b2層）と黄褐色砂層（b1層）が堆積しており、3号溝跡は黄褐色砂層を浸食して堆積する。覆土は暗茶褐色の泥炭質土で、流水量が乏しい時期の小流の可能性もあるが、人為的な関わりが強く遺構として扱った。覆土中には自然木が多く、一部に椀形木製品（未成品）や杭等を含む他、トチノキ種皮の出土が顕著である。ちなみに、本溝跡が浸食するb2層は中期の遺物を、b1層ではトチノキ種皮等を多く包含しており、後者は後述するトチ塚の一部と想定される。

4号溝跡（第200図）

C4・D4グリッドに位置し、主にb2層を浸食して3号溝に北側を切られながらほぼ並行して流れる。東部で3号溝の流れと同化して消失する。調査範囲で規模は幅0.6m、深さ0.15m、長さ6.5mである。断面の形態は南側の壁が急であり、底面はなだらかで、北側の壁に接してそのまま立ち上る片流れ状である。出土遺物は勝坂式～加曾利EⅠ式の土器群で、後者では漆塗土器を含む。また、オニグルミ核、トチノキ種皮などの植物遺体も出土している。

5号溝跡（第200図）

B4・5グリッドに位置する。北部は6号溝跡に切られる。北から南にかけての流れ、L字型に屈曲して南流する。溝跡の幅は流れの中で変化するが最大0.9mで、深さは0.18m、長さは4.5mの規模である。断面の形態は概ね西側がなだらかで、東側が急な立ち上がりである。出土遺物は少なく、縄文時代中期後葉の土器片が少量検出されている。

6号溝跡（第200図）

B5グリッドに位置する。1号溝跡に切られ、5号溝跡を切るが南部はほぼ並行して流れる。形態は5号溝跡同様に北西部から流れ、L字型に屈曲して南方へ流れる。規模は幅1.2m、深さ0.3m、長さ8.0mである。断面の形態は西側がややなだらかに立ち上がり、底面は平坦で、東側は急な立ち上がりである。出土遺物は

漆塗土器を含めた、縄文中期中葉から後葉の土器片が約50点出土している。

3号溝跡出土土器（第201・202図1～46）

3号溝跡から出土した土器は極めて少ないが、この溝跡が浸食するb1、b2層では比較的土器が出土しており、これらをここで掲載する。

1は前期の土器で、半裁竹管をスタンプ状に施文する。

2～11は勝坂Ⅲ式土器である。2は山形状の突起部で、左右が非対称の波状である。正面に楕円形の円孔を配し、口縁部は隆帯により区画文を描く。3も山形状を呈する突起部で、裏面に楕円形の円孔を配する。波頂部から爪形文が3列垂下し、集合沈線を充填する。4は渦巻状の突起部で隆帯の端部が丸く肥厚する。

5～7は口縁部片である。5は緩い波状を呈し、波頂部から隆帯が垂下する。6は口唇部から垂下する隆帯に沿って爪形文を施す。7は半裁竹管による方形の区画文内を集合沈線で充填する。8は半肉彫状の隆帯に爪形文を施す。9は区画文内に斜位の集合沈線を充填する。10は区画文内に撚糸文を配する。11は隆帯に沿って爪形文を施し区画文を描く。

12は勝坂Ⅲ式の円筒形を呈する土器である。縦位の隆帯が区画文を構成し、内部に沈線文を充填する。

13、14は口唇部に刻みを加える。13は口縁部の区画文内に2列の角押文が鋸歯状の文様を描く。14は斜位の角押文列を充填する。ともに阿玉台Ⅱ式である。

15は突起部で、右側縁に押圧と角押文が施され、区画文内は角押文を隆帯に沿って描く。16は口唇部から押圧のある隆帯が垂下する。17は縦位の断面三角形の隆帯に沿って角押文を施す。いずれも阿玉台Ⅱ式である。

18は胴部片で懸垂文が剣先状に蛇行する。阿玉台Ⅰb式である。

19は胴部に施された爪形文である。20は隆帯に沿って角押文が施される。阿玉台Ⅱ式である。

21は内湾する口縁部片である。2本隆帯による弧状のモチーフから頸部を区画する隆帯が派生する。22は渦巻文から隆帯が放射状に派生する繋ぎ弧文である。23は沈線で描かれた渦巻文の周囲を隆帯で囲っている。いずれも加曾利EⅠ式である。

24、25は口縁部文様帯が隆帯により三角形の区画文を描く。加曾利EⅡ式である。

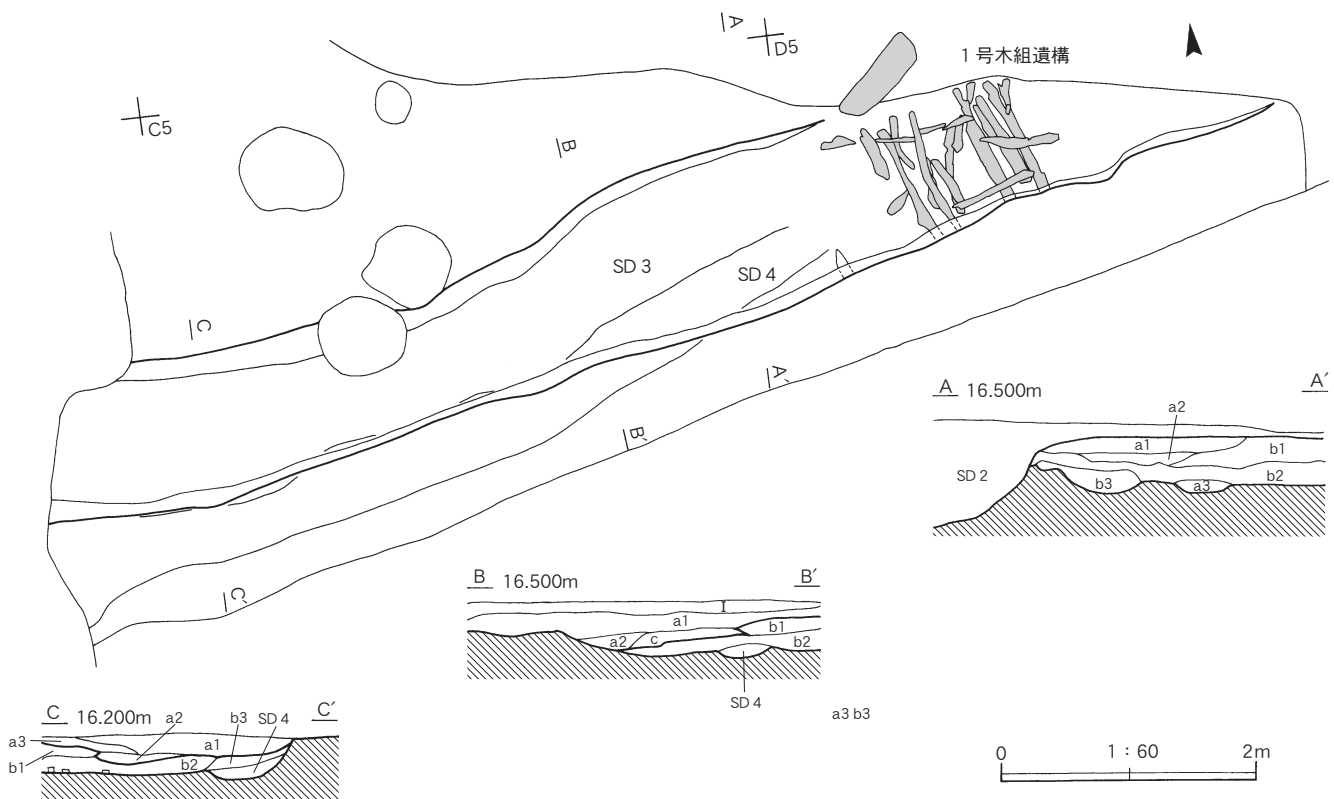
26～29は頸部付近の資料である。26は弧状の沈線が地文上を横走する。27は横位の波状隆帯が胴部と口縁部を区画する。28、29はともに広い無文帯である。

30は胴部の地文上に沈線による弧状の文様を描く。31～37は胴部の懸垂文である。31、32は平行する隆帯による懸垂文である。33は蛇行隆帯による懸垂文を描く。34～36は沈線が垂下する。

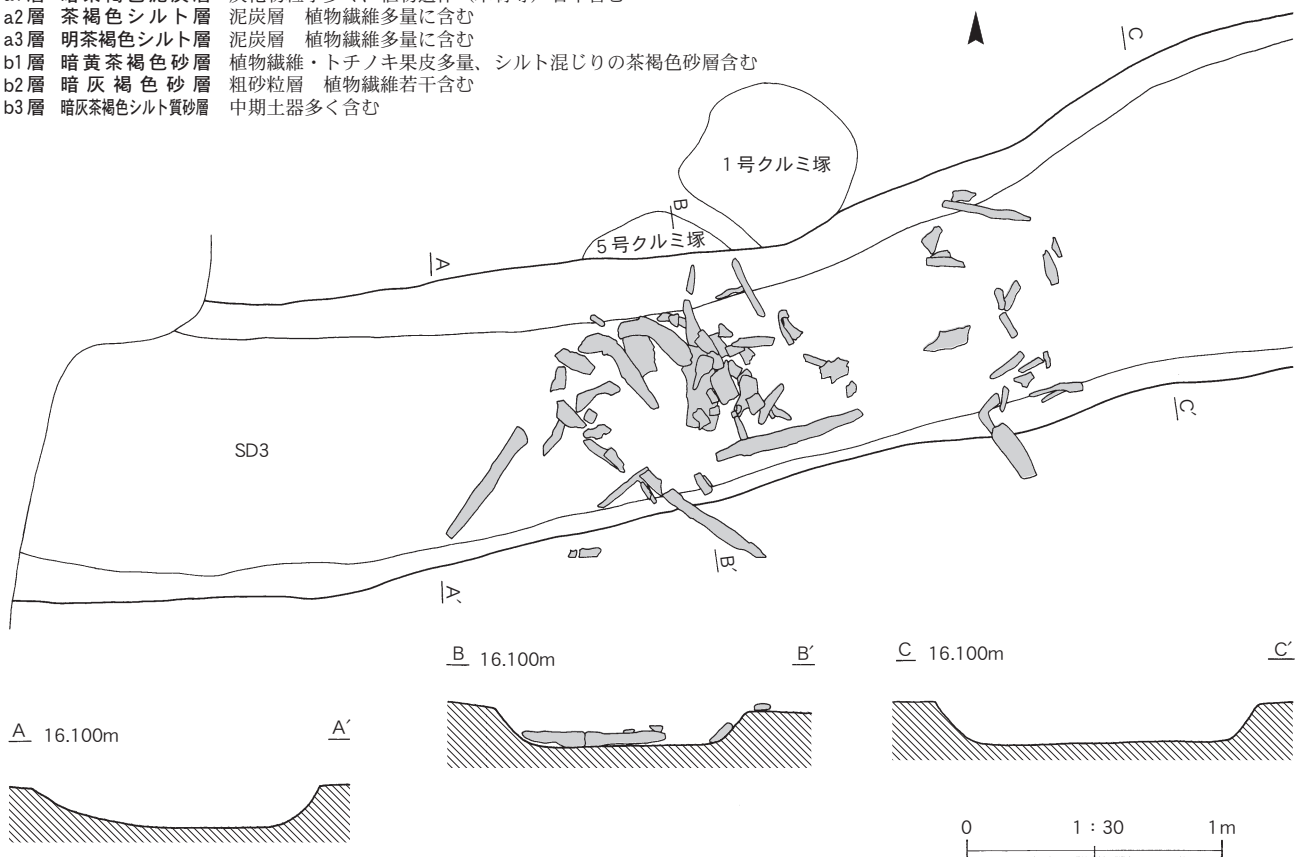
38、39は浅鉢形土器である。38は口唇部に太い沈線が廻る。39は口縁部が矩形に肥厚し、土器の最大径が胴部上半にある器形である。

40～42は加曾利EⅣ式の土器片である。39は縦位の微隆帯に沿って磨り消しによる無文の懸垂文を施す。40は斜位の櫛描文である。41は口縁部と胴部に横位の隆帯が廻る。

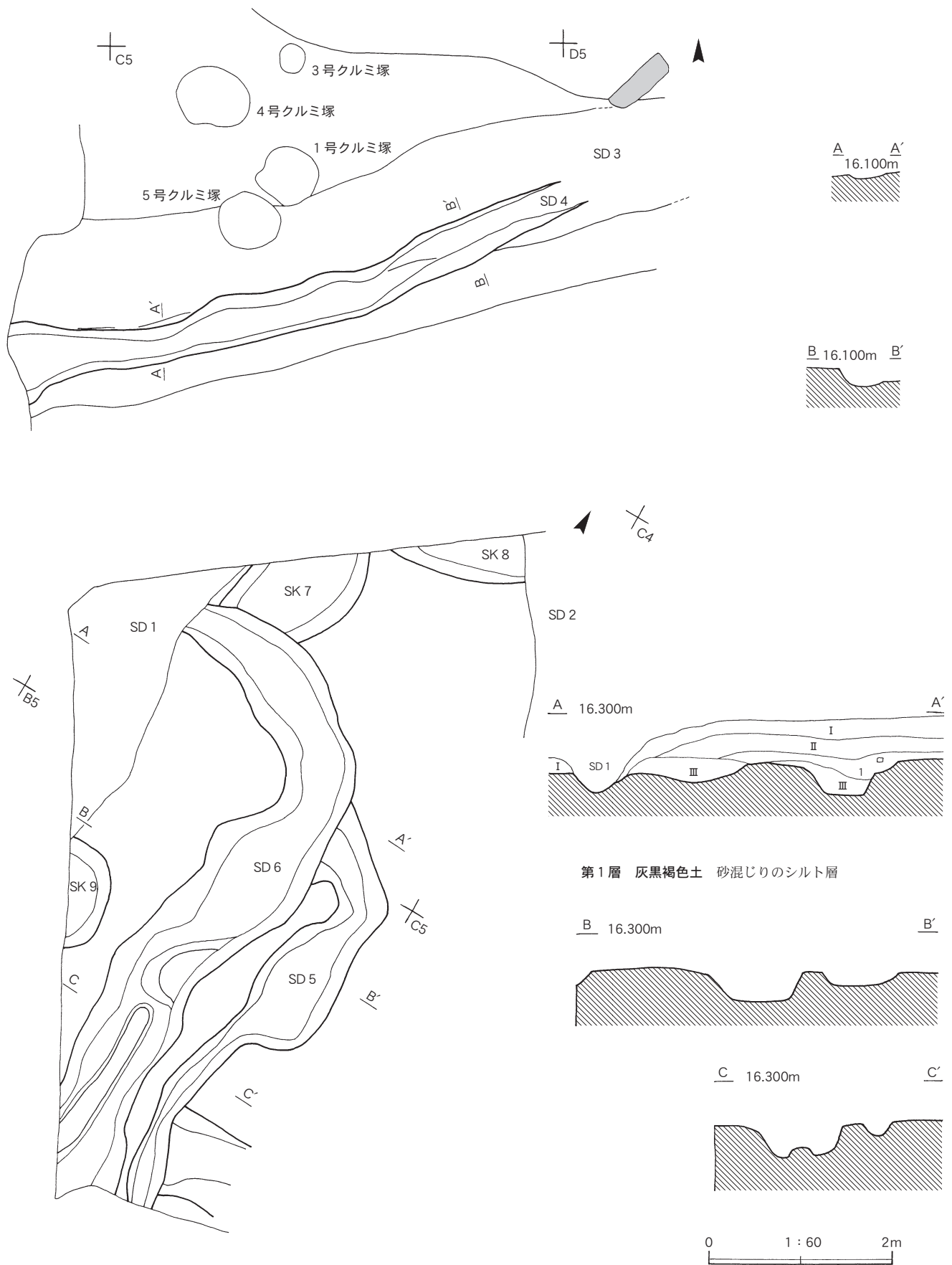
43～45は称名寺式の土器である。43、44は口縁部直下に無文帯が横走し沈線で区画される。45は平行する沈線内に列点が充填される。46は堀之内式期の粗製土器であると思われる。口唇部が内屈し内側はやや沈線状である。



- a1層 暗茶褐色泥炭層 炭化物粒子多く、植物遺体（木材等）若干含む
a2層 茶褐色シルト層 泥炭層 植物繊維多量に含む
a3層 明茶褐色シルト層 泥炭層 植物繊維多量に含む
b1層 暗黄茶褐色砂層 植物繊維・トチノキ果皮多量、シルト混じりの茶褐色砂層含む
b2層 暗灰褐色砂層 粗砂粒層 植物繊維若干含む
b3層 暗灰茶褐色シルト質砂層 中期土器多く含む



第199図 3号溝跡



第200図 4～6号溝跡・7～9号土坑

4号溝跡出土土器（第202・203図47～76）

47は諸磯b式土器の口縁部である。平行する複数列の爪形文を施す。48、49は諸磯c式である。48は鋸歯状の集合沈線文、49は円形の貼付文を施す。

50、51は山形状の突起部である。50は内湾する口縁部で波状を呈し、口唇端部は外反する。口唇直下に隆帯による区画文を施し、内部は爪形文が隆帯に沿う。51は突起の端部に角押文を施した円形浮文を対向させて貼付する。

52は半裁竹管による縦位の集合沈線が区画文を描く。53は貉沢様式の土器である。突起状の隆帯と縁辺の隆帯には爪形文が施され、器面全体には三角押文を配している。

54～57は刻みを有する隆帯による区画文を描く。いずれも綾杉状の刻みである。58は三叉文を中心に集合沈線と蓮華文を描く。

59は浅鉢形土器の屈曲部で、上面に短沈線を充填する。60は器台と思われる。円窓と周縁に刻みをもち、方形の貫通孔を有する。

61は阿玉台式Ib式土器の把手部である。波頂部に皿状の突起を設け、押圧のある隆帯を垂下する。口縁部の区画文内には複列の三角押文を充填し、波頂部には連弧状の角押文を施す。

62は突起部で周縁が肥厚し、裏面には刻みを連続して施す。63は口縁部の区画文である。1列の角押し文を隆帯に沿って施す。64は胴部に貼付する縦位の橋状突起で、左右は貫通しない。65は襷状の隆帯で三角押文を配し、対向するように施す。66は貫通孔に刻みを加えた隆帯を貼付する。いずれも阿玉台Ib式である。

67は加曾利EI式中空突起である。上端と正面に貫通孔を有する。山形状を呈し、端部は渦巻状に造形され、正面は沈線を施す。

68は波状を呈する口縁部片である。区画文内の地文は集合沈線である。69は頸部から派生した隆帯が渦巻文となる。70は口縁部には地文がなく、頸部には斜状の浅い沈線を施す。71は2本隆帯が弧状のモチーフを描く。72、73は頸部付近の土器で、いずれも縦位の撚糸文が施され、72は隆帯、73は平行する沈線を頸部との境に配する。74は隆帯による蛇行懸垂文である。75は3本の平行沈線が蛇行する。76は沈線による懸垂文である。

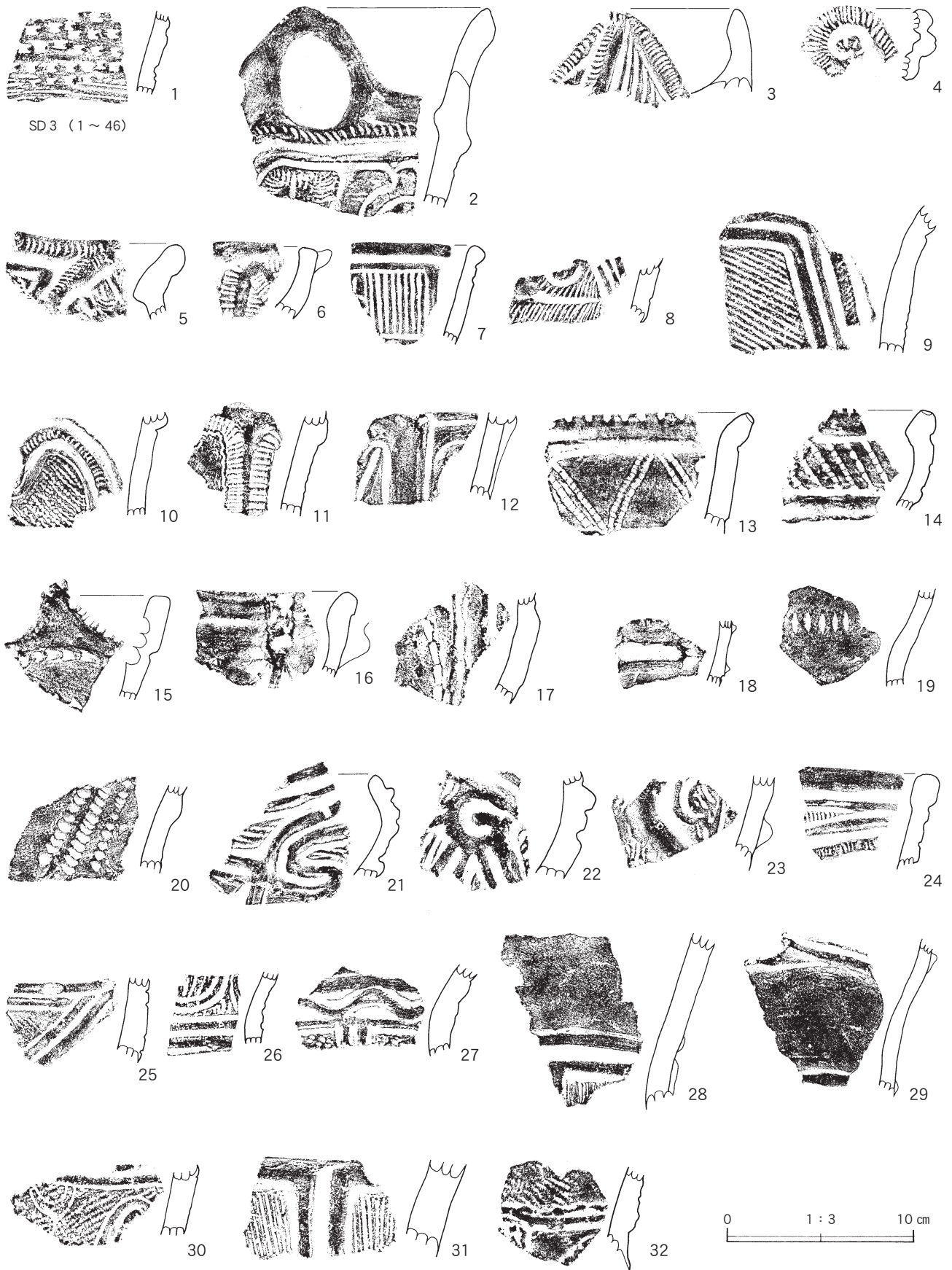
5号溝跡出土土器（第203図77）

77は勝坂Ⅲ式の土器である。隆帯による方形の区画内を爪形文が沿い、小波状の沈線を充填する。

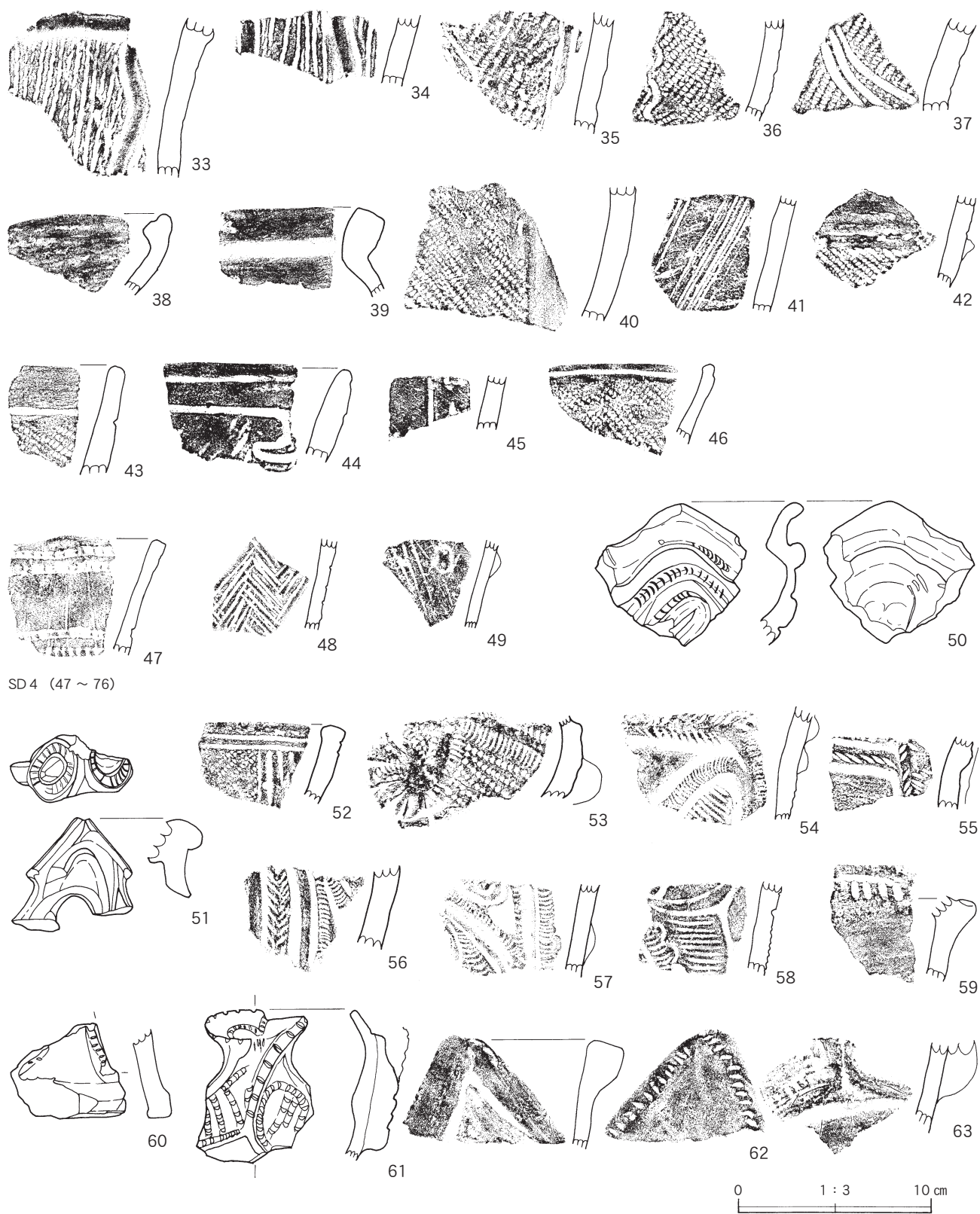
6号溝跡出土土器（第203図78～84）

78は口唇部が強く屈曲し、底状となっている。口唇部には内部に列点を充填し、方形区画文を連続して配する。屈曲部は肥厚し、刻みを施し、直下は格子状に撚糸文を施す。79は円筒形を呈する深鉢形土器で口縁部に広い無文帯を有する。80は三角形の区画文で隆帯と内部に爪形文を施す。

81～84は加曾利EI式の土器である。81は中空の突起部である。正面と裏面、左右と上部にそれぞれ貫通孔を有する。波頂部から沈線が螺旋状に垂下し、左側縁の口縁部に結合する。沈線によるモチーフのいくつかは端部を巻いて蕨手文状に描く。82は口縁部片で2本隆帯が口縁部文様帯を構成する。83は胴部片である。84は浅鉢形土器で口唇部が肥厚し、直下に刻みを施す。

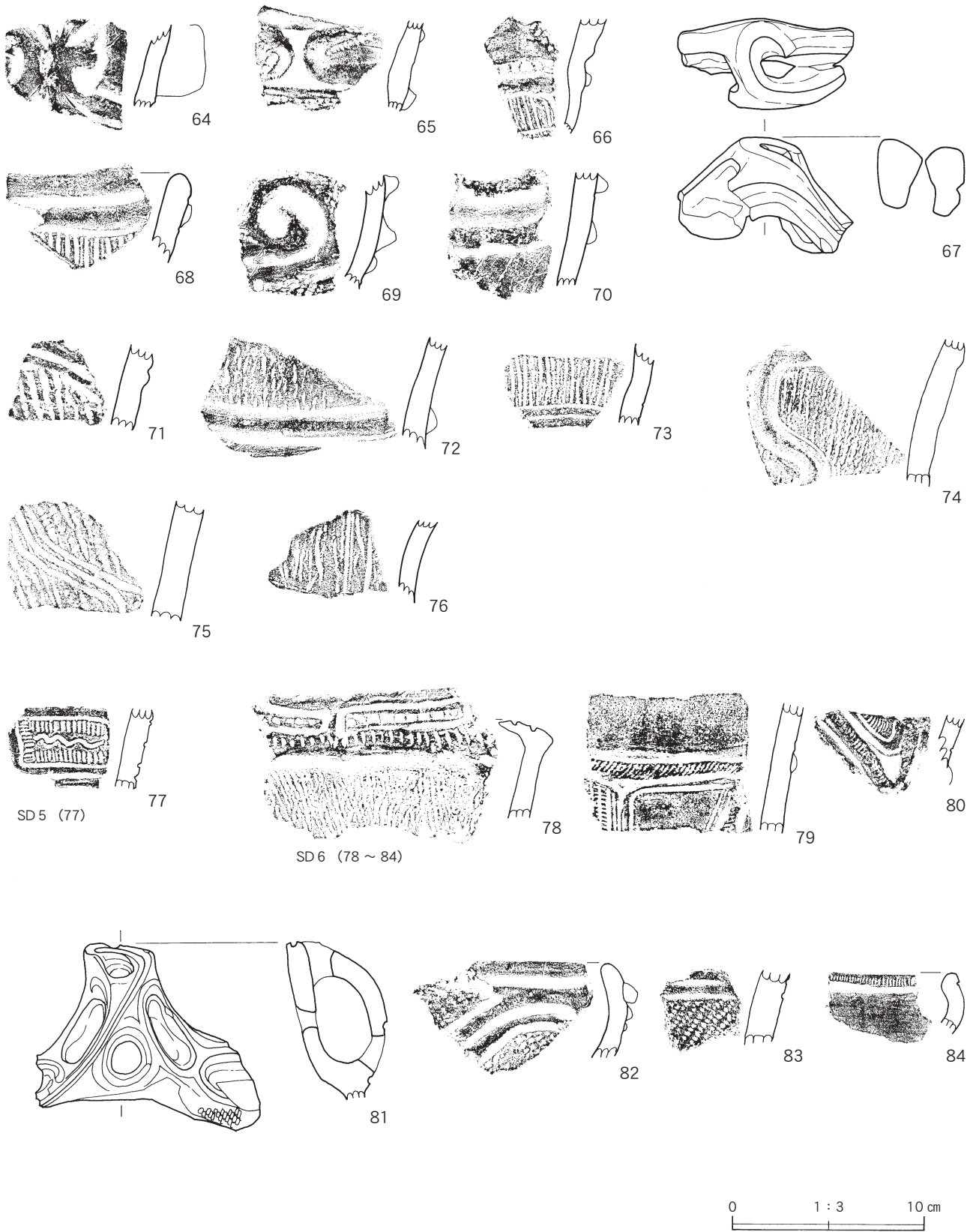


第201図 溝跡出土土器（1）



SD 4 (47 ~ 76)

第202図 溝跡出土土器 (2)



第203図 溝跡出土土器（3）

(4) 木組遺構

1号木組遺構 (第204図)

1号木組遺構はD5グリッドの3号溝跡下のb2層上部に構築されている。調査当初は3号溝跡の覆土を掘り下げたところ、南北に平行して敷かれた棒状の木材及びこれと直行する杵状の木材が検出された。

本遺構の覆土は暗茶褐色泥炭質層(a1層)であり、トチノキ種皮が多く検出されたため、「水さらし」に関わる遺構と想定された。この段階で規模は1.3×0.9mと想定したが、南側のb1層を掘り下げたところ、棒状の木材はさらに延び、最終的には2.0×3.3mの規模となった。このため、当初は流れのある中期相当の砂層上に構築された後、3号溝跡の段階で再利用された可能性がある。年代測定では縄文中期末～後期初頭と構築材に時間差があり、長期にわたって利用されたものかどうか注意を要する。材はクリ・コナラ節・カエデ属・ウルシ等、杵材はクリ・カエデ属・ウルシ等で、このうちウルシが3点検出されており注目される。

1号木組遺構出土土器 (第205図)

1は胴部片で隆帯の端部を巻く蕨手状である。2は阿玉台Ⅱ式の土器である。胴部の隆帯が矩形に肥厚して突起状で、ここを起点として断面三角形の隆帯が方形の区画文を構成する。

3、4は加曾利EⅠ式である。3はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部で、地文に条線を施す。4は胴部片で、北関東系の土器にみられる、結節沈線文によって蕨手文状の文様を描く。

5は中峠系の土器である。隆帯が蜷局状の突起となり、ここから刻みをもつ隆帯の弧線文が派生する。

6は中期の浅鉢形土器の底部である。

(5) トチ塚

トチ塚 (第206図)

C5グリッドの南端に位置し、調査区の南壁セクションでその存在が確認された。3号溝跡が浸食するb1層(第192図C-C')がトチ塚の層位に相当し、東西8m、厚さ10～15cmの範囲でトチノキ種皮が集中して堆積する。トチ塚の一部は調査区南部にも及ぶが、排水溝の掘削時に一部が消失している。時期は堀之内Ⅱ期～加曾利BⅠ期である。

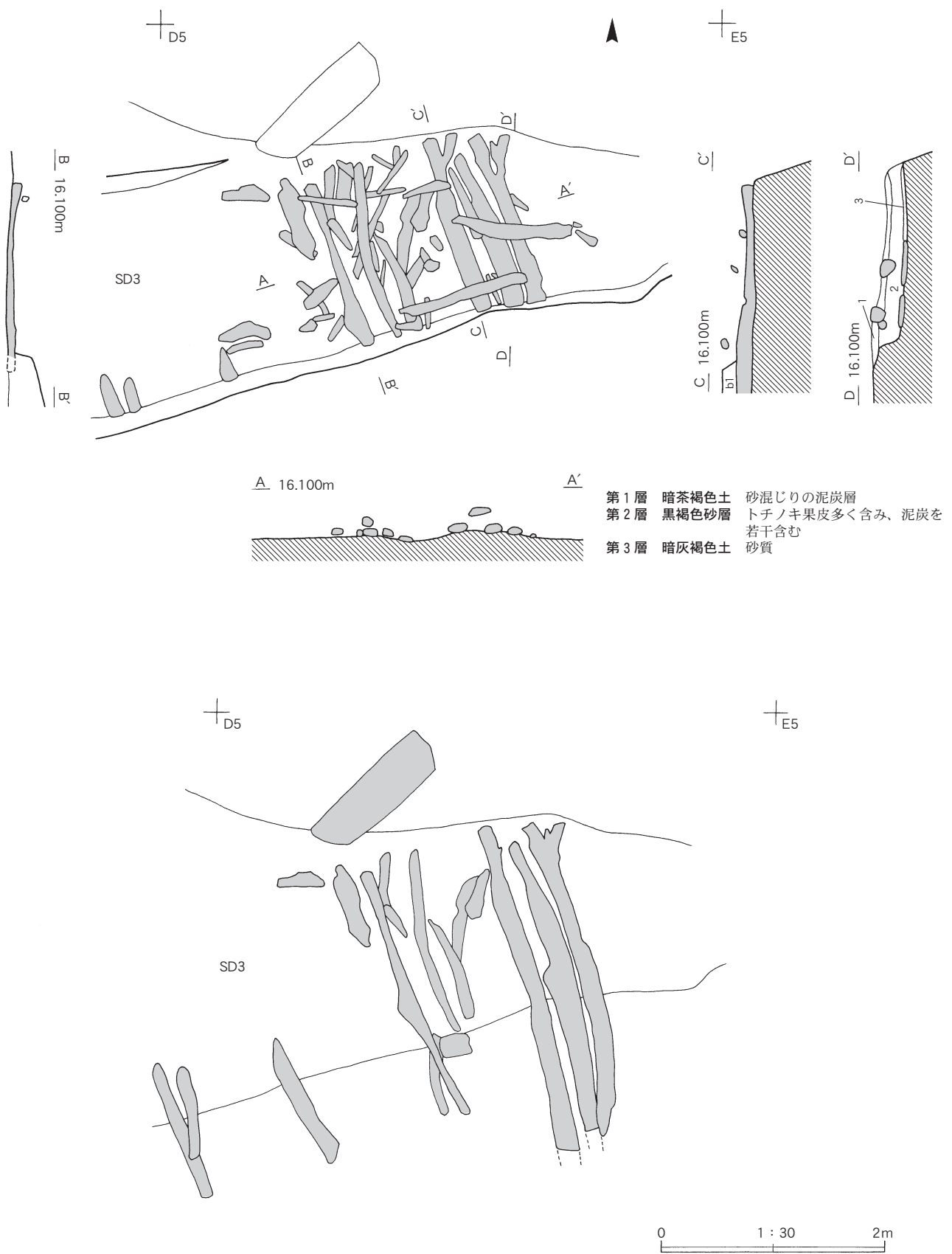
集落の位置する台地下の水際においてトチノキ種子の皮を剥いた作業痕と想定される。なお、調査区出土のトチノキ種皮の分布は第206図に、参考としてクリ・ナラガシワの分布を第207図に示した。

(6) 砂道跡

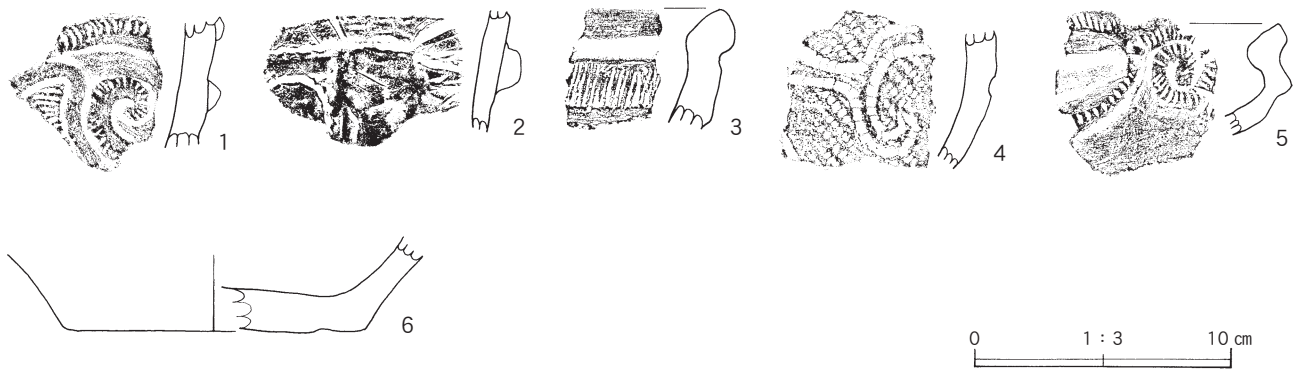
砂道跡 (第208図)

砂道跡はD3・D4グリッドを中心に位置し、2号溝跡に切られている。調査区の北東部には本流の岸辺となる高まりが認められ(第192図A-A'のA層)、砂道跡はここから南へ延び、途中で東側へL字形に展開する。最大幅で2.4m、延長で10.4mの規模である。砂道は淡茶褐色粘土と砂を混合させ、踏圧により堅緻な面を厚さ約12cmで形成する。C3・4グリッドではⅡb層とⅠb層との間に構築されており、2号クルミ塚と同時期であることがわかる。

本遺構の用途は明確ではないが、泥濘な泥炭層中の歩行を容易にするための遺構であると想定される。また、遺構周辺にはクルミ塚や土器片が多く、これらの植物遺体や土器等を廃棄するために利用されたものと想定される。なお、遺構中からは加曾利EⅠ式、勝坂式、阿玉台式土器が検出されている。



第204図 1号木組遺構



第205図 1号木組遺構出土土器

砂道跡出土土器（第209図）

1は諸磯c式の土器である。器面に縦位、斜位の集合沈線を施す。2は縄文を施す口縁部に沿い、連続する三角押文と小波状の沈線を廻らす。3は口縁部に沿って半裁竹管による平行沈線を施し、浅い斜状の沈線文を描く。

4は加曾利EⅠ式の繋ぎ弧文で、渦巻文が突起状である。

5～10は勝坂Ⅲ式の土器である。5は弧状の隆帯の区画文内に集合沈線を充填する。6は矩形の隆帯に集合沈線が結節する。7は横位の隆帯上に交互に短沈線が施される。8は半裁竹管により横位の隆帯を施し、集合沈線を充填する。9は隆帯に沿って角押文を施し、地文を磨り消している。10は隆帯に沿って爪形文を施し、区画文を構成する。内部には角押文が並走し、三叉文を沈線で描く。

11は口唇部が肥厚し、外側に突出する。口唇直下は爪形文を施し、複列の角押文が並走する。阿玉台Ⅱ式である。12は大波状の口縁部である。肥厚する口唇部や波頂部から垂下する隆帯上には、単節縄文を施す。隆帯及び口唇部に沿って沈線文を配し、地文は撚糸文とする。阿玉台Ⅳ式である。13は隆帯による区画文を描く。有節沈線を隆帯に沿って施し、内部は刺突文を充填する。阿玉台Ⅱ式である。

14は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部である。地文上に波状の隆帯が横走し、隆帯に沈線で渦巻文を描く。15は隆帯が剥離するが、渦巻文が描かれていたであろう。16は隆帯により区画文を描く。17は密な沈線による渦巻文である。いずれも加曾利EⅠ式である。

18は曾利系の口縁部片である。縦位の集合沈線を施す。19は加曾利EⅣ式の土器で、胴部の広い無文帯が縦位の微隆帯により区画される。

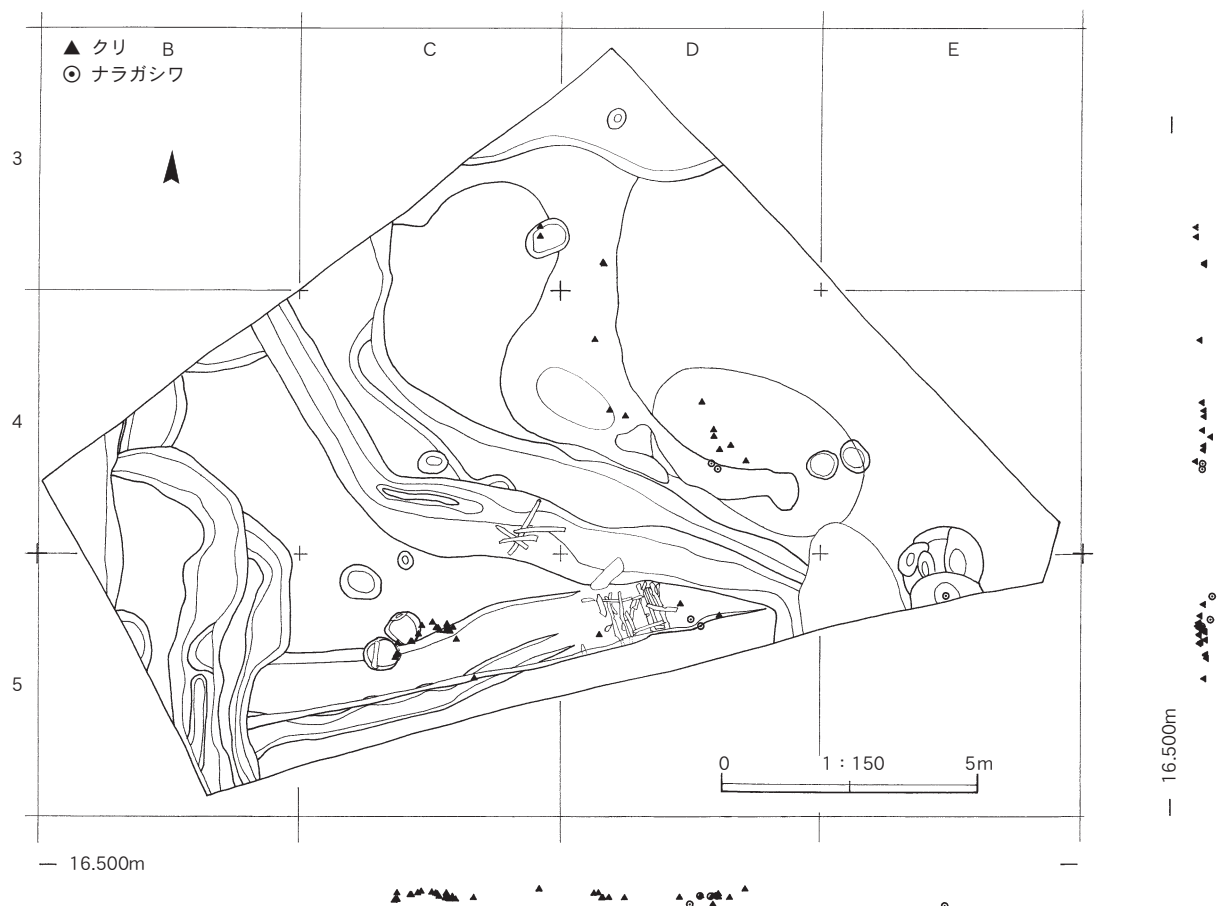
20は深鉢形土器の把手である。コップ状を呈し、集合沈線により文様を描く。称名寺Ⅰ式に比定される。

21、22は堀之内Ⅰ式土器である。21は口唇部直下内側が沈線状である。文様は弧状の懸垂文の中央に平行する沈線が垂下する。22は口唇部直下に3本の沈線が廻る。地文は撚糸文である。

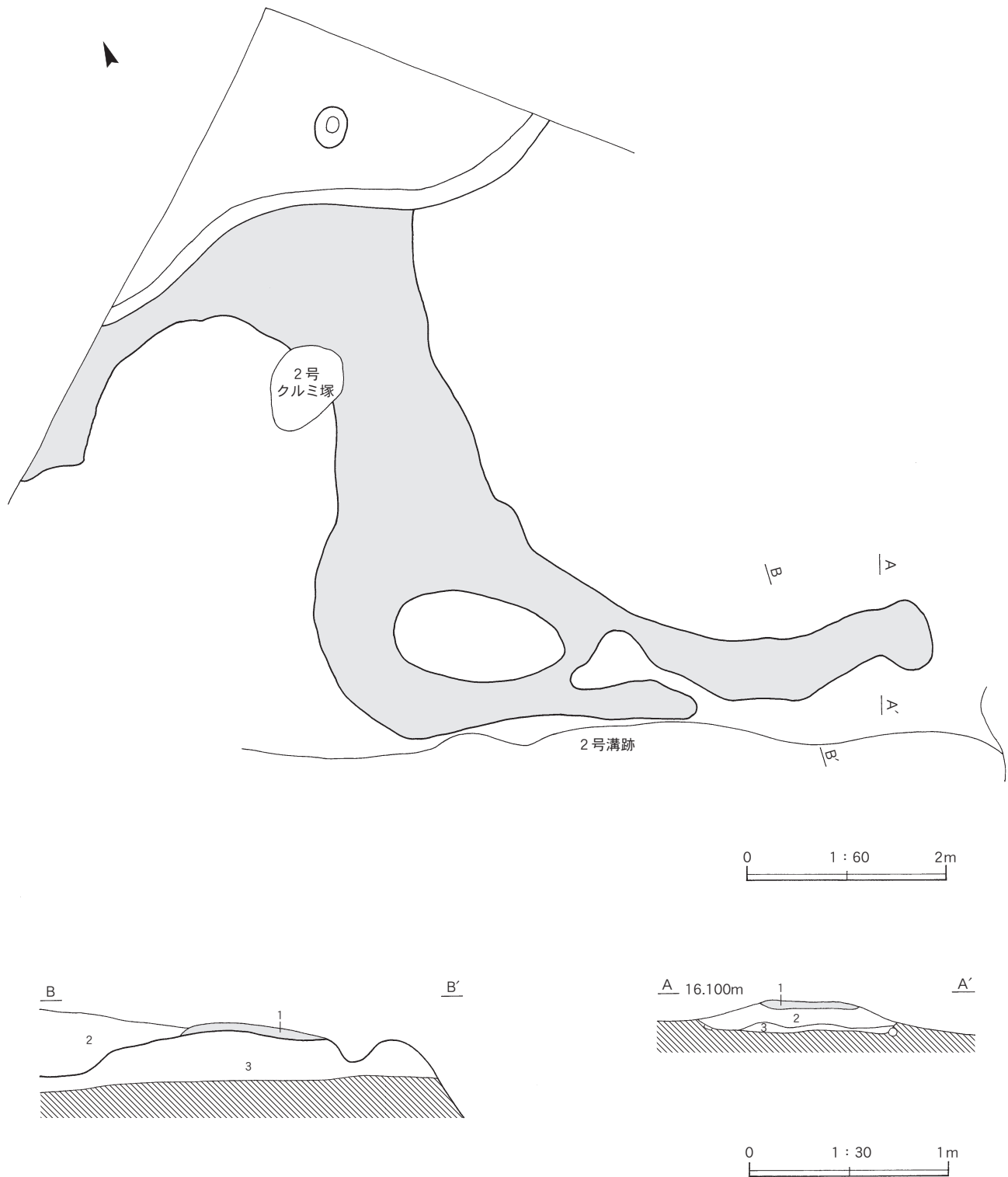
23は縄文後期の浅鉢形土器の底部であろう。



第206図 トチノキ種皮分布図



第207図 クリ・ナラガシワ分布図



- 第1層 灰茶褐色土 砂道跡の硬化面 黒色シルトと砂の混合土で均一性高い
 第2層 暗茶褐色土 植物繊維極めて多量 クルミや炭化物等を多く含む
 第3層 黒茶褐色土 砂道下のIb相当層 木片・植物繊維多く含む

第208図 砂道跡



第209図 砂道跡出土土器

(7) 包含層出土の遺物

Ⅱa 層出土土器 (第210図)

1は波状口縁を呈して内湾する器形で、突起部は直立する。波頂部から八字状に短沈線を施す隆帯が垂下する。2は交互短沈線を施した隆帯が弧状の区画文を描く。区画内は沈線により渦巻文を施す。3は爪形文によって描かれる区画文で、内部に三叉文を施す。4は外反する口縁部で屈曲部に沈線を廻らし、直下に撚糸文を施す。5は円筒形の深鉢形土器で、口唇部が強く内屈し、内側が底状に張り出す。6は山形状の突起部で裏面に円孔を施す。

7～9は区画文内に三叉文を描く土器である。8は区画内に角押文が施される。9は爪形文で三叉文を縁どる。

10は区画文内に縦位の集合沈線を充填し、一部に角押文を施す。11は浅鉢形土器で屈曲部に爪形文を横位に施し、口縁部文様帯は沈線による区画文である。以上は勝坂式土器である。

12、13は阿玉台式土器である。12は隆帯に沿って浅い角押文を施し、地文はLRの単節縄文である。13は対向する鰓状の隆帯から懸垂文が垂下する。

14、15は加曾利EⅠ式の深鉢形土器である、14はやや波状を呈する口縁部片で、密な渦巻文を沈線によって施す。15は頸部の無文帯である。

16は深鉢形土器の底部で、わずかに内湾しながら立ち上がる。

17は浅鉢形土器で、屈曲部は外側へ底状に張り出し、口唇部は平坦で肥厚する。口縁部には渦巻文を描き、ここから派生する沈線と平行する沈線の端部を入り組み状に表現する。18は無文の浅鉢形土器の口縁部片で、補修孔が内側から外側へ穿たれる。

19は縄文後期の堀之内式土器である。平行沈線による懸垂文を描く。

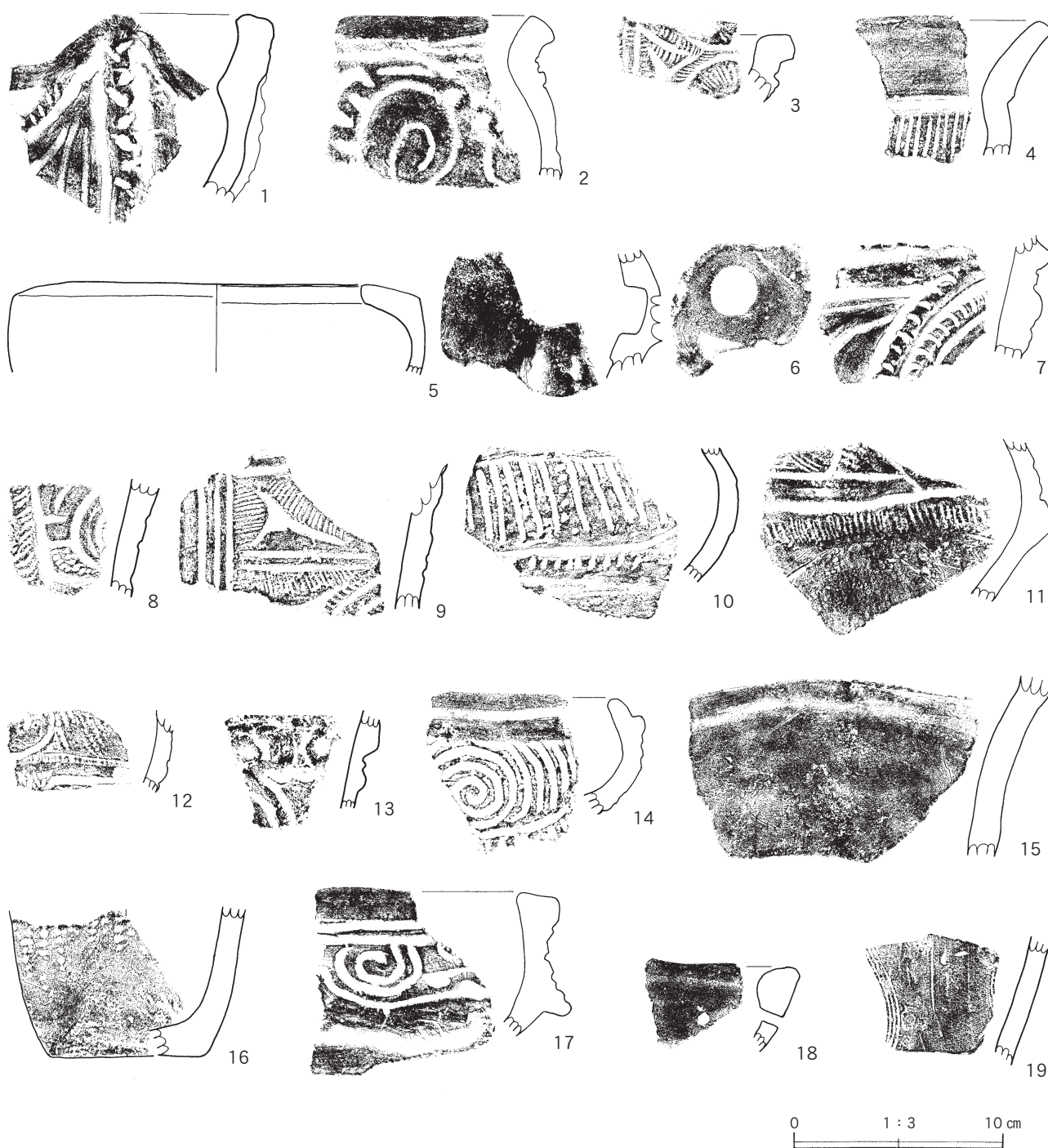
Ⅱb 層出土土器 (第211・212図)

1は勝坂Ⅰ式の浅鉢形土器である。底部から内湾するように立ち上がり、口縁部は直立して口唇部へ至る。口唇直下は折り返し口縁により肥厚し、三角押文が4条一組にして、4単位廻ると想定される。口縁部と胴部は地文を磨り消した細長い無文帯が画する。胴部の地文はRLの単節縄文を施し、底部付近は再び磨り消しにより無文帯となる。復元口径は14.7cm、現存高は9.6cmである。胎土には細礫、砂粒を含む。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈する。

2、3は諸磯b式の土器である。1は地文にRLの単節縄文を施し、横位に櫛描文を描く。2は浮線文を横位に施す。

4は深鉢形土器の山形状の突起部である。左側縁に向いて、円孔を配する。波頂部から隆帯が垂下し、口縁部を波状に横走する。区画内は半肉彫状のモチーフに爪形文が加えられ、ここから沈線が派生して渦巻文に変化する。5も波状口縁の突起部である。波頂部から隆帯が垂下し、モチーフを描くが、右側縁を向いて円孔を配す。隆帯に沿って爪形文が描かれ、内部に単節縄文を施す。6は円板状の突起である。表面は貫通孔を中心に沈線が3重に廻り、最外部の端部は丸く太くなり、J字状にもち上がる。裏面は渦巻状に沈線が廻る。

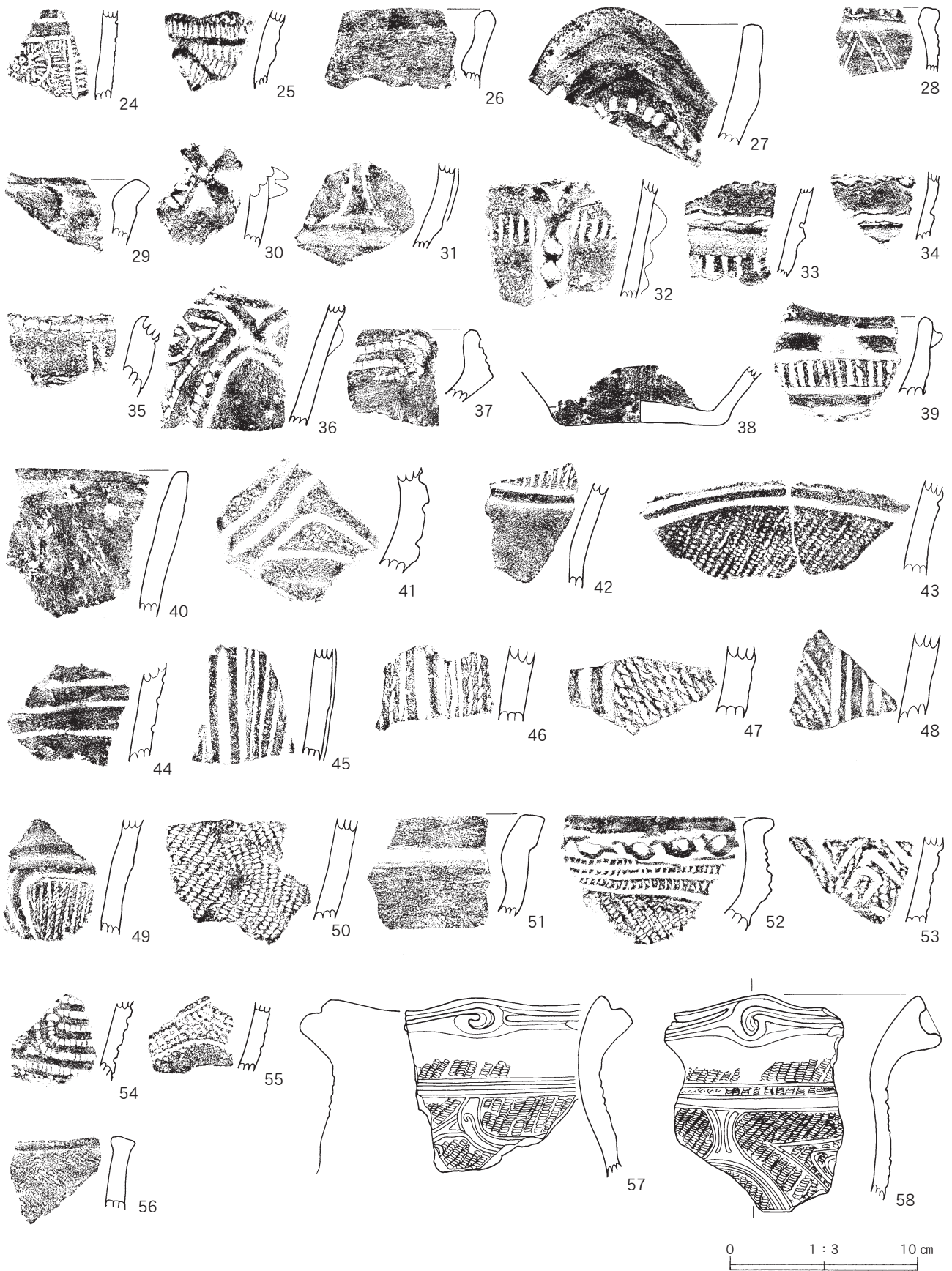
7は山形状の突起である。隆帯に沿って爪形文が二重に施される。8は口唇部直下に描出される楕円形区画文である。隆帯に沿って内部に角押文を施し小波状の沈線を配する。9は勝坂Ⅱ式のパネル文土器である。刻みを伴った円と楕円の貼付文を中心に半肉彫状の隆帯を3本ずつ配し、最も外側で斜状に変化する。10は勝坂Ⅰ式で、蜷局状の突起から交互に短沈線を配した隆帯が派生し、周辺を角押文で充填する。



第210図 IIa層出土土器



第211図 I b層出土土器(1)



第212図 Ib層出土土器（2）

11は鉢形土器と想定され、勝坂Ⅱ式である。形状、大きさがさまざまな区画文を器面に描出する。口唇部には爪形文を施し、器面の隆帯にも爪形文を沿わせ、区画内部はRLの単節縄文を施す。

12は口縁部が無文帯となり、屈曲部に沈線を廻らして区画し、直下に弧状の沈線と刺突による文様を描く。

13は屈曲部の隆帯が外側に庇状となり、口縁部から垂下する隆帯がX字に交わる部分で突起状に突出する。隆帯に沿って爪形文が施され、内部に角押文によるモチーフを充填する。

14は楕円形横帯文の一部と想定され、隆帯上と裾部に爪形文を施し、内部に波状の沈線を充填する。

15～20は隆帯により楕円形区画文を描出する。15、16は集合沈線を充填する。18は区画文が対向する。刻みのある隆帯のみが外側に突出し、直上に蜷局状の貼付文を有する。

19はC字状の貼付文が配され、鋸歯状の刻みを有する隆帯と結節する。20は矢羽状の刻みを隆帯に施す。21は楕円形区画文から横位の隆帯が派生する。

22は円筒形を呈する深鉢形土器である。縦位のパネル文を沈線が主体となって描く。23は蛇行する隆帯が途中で外側へ突出して突起状となり、再び隆帯となって垂下する。24は沈線による縦位の文様帯が描かれ、爪形文と竹管による刺突文を配する。25は隆帯に沿って爪形文を施す。26は浅鉢形土器である。

27は阿玉台Ⅱ式の突起部である。半円形を呈し、太い角押文を波頂に沿って施す。

28は2列の有節沈線が鋸歯状のモチーフを描く。29、31は対向する襷状の隆帯を貼付する。30は胴部に貼付したX字状の隆帯で、中央に円孔を穿つ。

32～35は阿玉台Ⅰb式である。32は横位に幅の広い爪形文を施し、Y字状の隆帯が垂下する。33、34は隆帯に沿って小波状の沈線を配する。35は隆帯に沿って角押文を配する。36は阿玉台Ⅱ式の胴部片である。Y字状に垂下する隆帯に沿って2列の角押文を施し、併せてモチーフを描く。

37、38は浅鉢形土器である。37は楕円形区画文の端部が口唇部に飛び出し小突起状である。

38は阿玉台式土器の底部片と想定され、わずかに底面がへこむ。

39は加曾利EⅠ式の口縁部片である。区画文内は縦位の撚糸文である。40は曾利系の口縁部片であろう。無文でわずかに内湾しながら立ち上がる器形である。41は2本隆帯による区画文を描く。

42～44は頸部付近の資料である。42は横位の隆帯で区画し、内部は単節RLの縄文による撚糸文である。43は幅の広い頸部無文帯を有する。44は横位の平行沈線により胴部と頸部を区画する。

45～49は深鉢形土器の懸垂文である。45、46は平行する隆帯を施す。47、48は沈線による懸垂文で、内部は地文を磨り消している。49は蛇行隆帯が垂下する。

50は深鉢形土器の胴部片で、単節縄文が地文である。

51は浅鉢形土器で、口唇部が矩形に肥厚し、最大口径が胴部上半にある器形である。

52は勝坂Ⅲ式の浅鉢形土器である。口唇部は平坦で外側に突出する。口唇部直下には円形の押圧と短沈線を交互に施し、横位の刻みのある隆帯が複数条廻り、胴部と区画する。

53は連弧文土器の胴部片である。2条の沈線を鋸歯状に配する。

54、55は角押文によるモチーフを描く勝坂Ⅰ式の土器である。54は対向する楕円形のモチーフであろう。

56は勝坂式の口縁部片で、平坦な口唇部直下にRLの単節縄文が施される。

57、58は大木8b式の深鉢形土器で、同一個体と思われる。口唇部には渦巻文を4単位配し、それぞれわずかに突起状をなし、ここから沈線が派生して横位に流れる。口縁部は無文帯であり、後から地文を施す。3条の沈線が横位に胴部を区画し、胴部には平行する沈線で大きな弧状の文様を描き、剣先文や蕨手状の文様を配する。復元口径は20.5cmで、残存高は11.5cmである。

Ⅱb 層出土土器（第213・214図）

1 は黒浜式土器で、波状口縁の波頂部である。口唇部の断面は矩形で粗雑な斜縄文を施す。2～4 は附加条縄文を施す黒浜Ⅲ式土器である。5 は口縁部片で横位の集合沈線文を施し、諸磯c式である。

6 は大型の眼鏡状突起である。左右方向に貫通孔を開け、右貫通孔の下部には半裁竹管による半円形の刺突列を施す。波頂部は左側縁が高く、右側縁は一段低い。左側縁には蕨手状の微隆帯を配し、口唇部と結束する。波頂部から垂下する隆帯には途中から刻みを施し、貫通孔の直下から派生した隆帯と接合する。両側縁は楕円形区画文を交互短沈線の施された隆帯で描く。器形はやや外反して立ち上がる。

7 は半円形の突起で、口縁部に貼付され、口唇部へ突出する。沈線により同心円状のモチーフを充填する。

8、9 は円筒形を呈する深鉢形土器の口縁部片である。8 は沈線による渦巻文の周辺に爪形文を施す。9 は口唇部が外側に突出する。沈線により区画文が描かれ、三叉文を充填する。

10、11 は隆帯による縦位の区画文を描く。10 は弧状の隆帯に沿って交互短沈線が施され、半肉彫状の隆帯を配する。12 は内湾する器形の深鉢形土器であろう。蛇行した隆帯の端部に楕円形状に肥厚する抽象文を貼付する。

13～15 は阿玉台Ⅱ式の土器である。13 は爪形文と平行して有節沈線文を施す。14、15 は口縁部の区画文で、区画内には角押文を隆帯に沿って施す。

16、17 は阿玉台Ⅰb式である。横位の輪積痕を爪形状の意匠として残して描く。

18 は加曾利EⅠ式の円形の突起で、貫通孔を有する。

19～21 は口縁部片である。いずれもキャリパー形を呈する深鉢形土器である。19 は斜状の2本隆帯で区画し、区画文内には沈線文を充填する。20 は弧状の隆帯が口唇部直下で結節して肥厚する。繋ぎ弧文状で、頸部には横位の集合沈線文を施す。21 は横位の撚糸文が地文となる。

22～25 は深鉢形土器の胴部片である。22 は3本沈線による懸垂文である。23 は平行沈線と蛇行懸垂文を交互に施す。24 は蛇行隆帯の一部であろう。25 はRLの単節縄文による地文である。

26～28 は浅鉢形土器である。26 は口縁部が強く外反し、屈曲部直下に楕円形区画文を配する。27 は直立状で口唇部は平坦である。28 は無文の胴部片である。

29、30 は中峠系の深鉢形土器である。口縁は波状を呈して無文である。括れ部には交互刺突文が廻る。胴部上半が球胴系に張り出して最大径となる。胴部文様帯はLRの単節縄文により地文を施し、半裁竹管による平行沈線で縦位に文様帯を区切り、区画内に蕨手状のモチーフを上下に描く。30 はモチーフが矩形である。

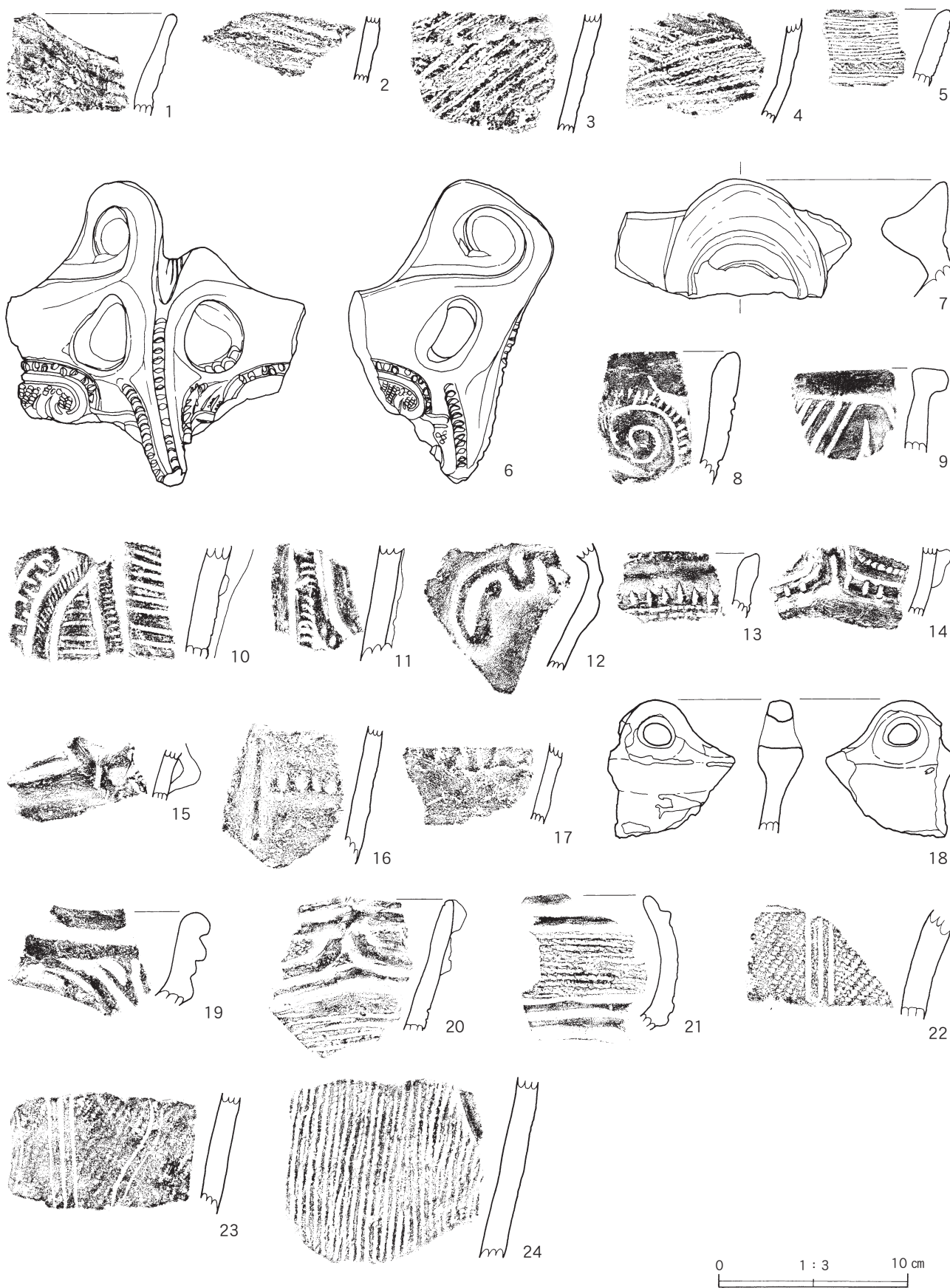
31、32 は堀之内式土器である。31 は深鉢形土器で、32 は注口土器の胴部片である。

Ⅱ層出土土器（第215～219図）

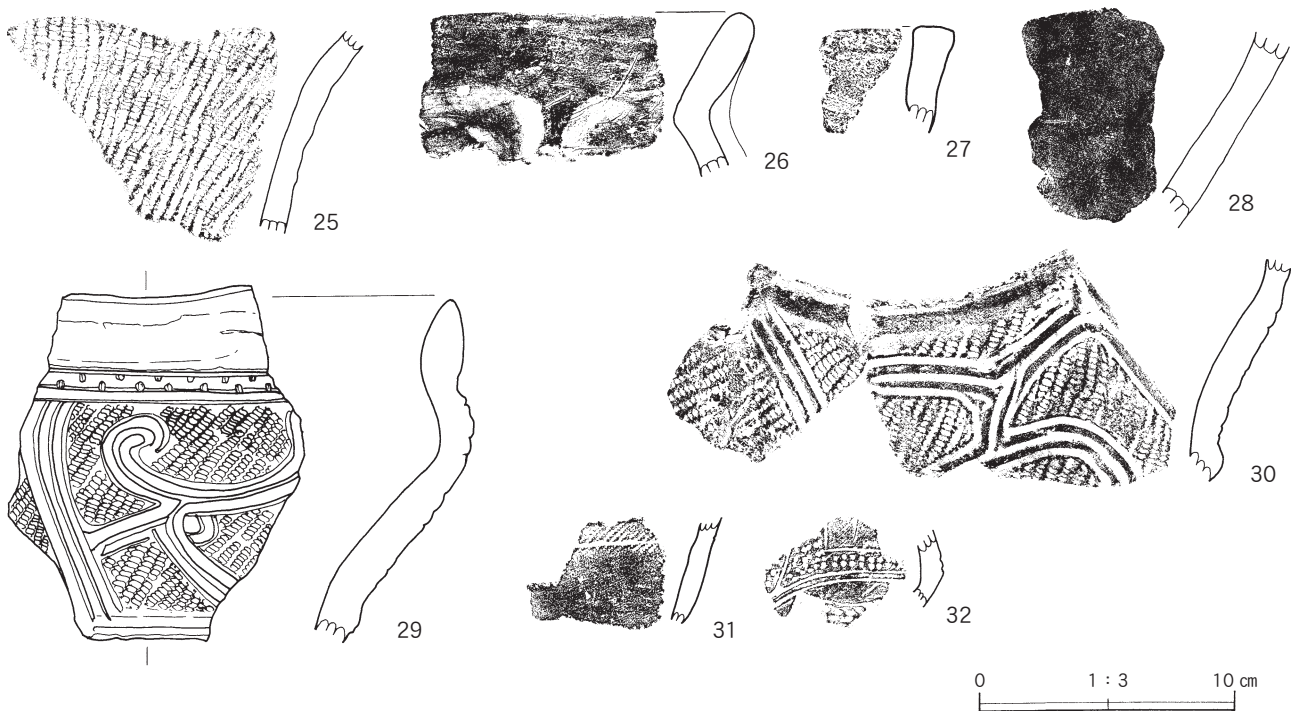
1 は早期の撚糸文系の土器である。深鉢形土器の括れ部であると想定される。

2～11 は縄文前期の土器群である。2 は関山Ⅰ式土器である。半裁竹管による幾何学文に刻みを加え、文様の起点に貼付文を施す。3～6 は黒浜式土器である。3 は羽状縄文と横位の撚糸文を施す。5 は無節と単節縄文の撚糸文を重ねている。7～10 は諸磯c式土器である。7 は口唇部から2条の結節貼付文が垂下する。地文は集合沈線文である。8 は結節貼付文に刻みを施す。9 は格子目状に施された地文に貼付文を施す。10 は器面全体に豆粒状の貼付文を配している。11 は口縁部が矩形に外側へ肥厚する。3条の沈線による横位、斜位、鋸歯状の文様を口縁部直下に施す。十三菩提式であろう。

12～14 は深鉢形土器の突起部である。12、14 は山形状の突起で、12 は波頂部から襷状の隆帯が垂下する。左側縁には爪形文で縁どられた三叉文を描く。基部に貫通孔を配する。14 は表裏及び右側縁部に波頂部から



第213図 IIb層出土土器(1)



第214図 IIb層出土土器（2）

刻みのある隆帯が垂下し、内湾する器形である。13は半円状の橋状突起である。表裏とも沈線間に刻みを施したモチーフを配する。

15～31は勝坂式の口縁部片である。15は楕円形区画文内に集合沈線を充填し、対向する区画文内には三角押文を施す。16～19は刻みのある隆帯が斜行して区画文を構成する。16は口唇直下に交互刺突文を廻らし、隆帯が突出して突起状である。17は口唇部から垂下する隆帯がY字状に結節する。18は隆帯間に沈線文を充填する。19は口唇部で突起状に突出した隆帯が口縁部で文様帯に変化して垂下する。爪形文が微隆帯を挟んで施される。20は口縁部の屈曲部に沈線が廻り、集合沈線を充填する。21～23は隆帯による区画文内に沈線文を充填する。21は胴部に突起状の貼付文が施され、沈線を刻む。22は交互短沈線と沈線を縦位に施すそれぞれの隆帯が区画文を構成する。23は外側に底状に張り出した突起から隆帯が派生して垂下する。

24～26は口縁部直下に交互刺突文を横位に廻らす。25、26は爪形文が平行する。

27は楕円形区画文内に三叉文と弧状の沈線を充填する。

28は勝坂Ⅱ式の土器である。口唇部直下は半裁竹管による隆帯が廻り、縄文を施した半肉彫状の隆帯に交互短沈線を施して蛇行状とする。

29は口唇部の突起部で、表裏に蛇行隆帯を貼付し、2列の角押文が沿う。下部は貫通孔である。

30は波状口縁である。隆帯に沿って2列の角押文を施す。29とともに大木式系の土器である。

31は口唇部に山形状の突起を配する。口縁部は刻みを有する隆帯により楕円形区画文が構成される。区画内は縦位の集合沈線を充填し、この間に爪形文を施す。胴部は縦位の隆帯により区画文を新たに展開させ、横位の集合沈線と爪形文を主文様として描き、渦巻文や三叉文を配する。

32～36は集合沈線による充填文を描く。35は沈線を綾杉状に施す。36は半裁竹管による縦位の施文である。

37～47は隆帯により区画文を描出する。37は三叉文を描く。38、39は弧状の隆帯による区画内に同心円状

の沈線文を充填する。40、41は胴部が肥厚し、窪み状の区画内に沈線文を充填する。42、43は横位の隆帯である。43は鎖状に展開する可能性がある。44は楕円形横帯文の一部である。45は矩形の区画文が連続する。

46は口縁部付近で、斜状の地文を隆帯が磨り消している。47は楕円形横帯区画文で爪形文が隆帯に沿う。

48は渦巻状の隆帯に爪形文を周縁に施し、小波状の沈線を配する。49は表裏に2本隆帯による蕨手状のモチーフを配する。下端には貫通孔を有する。50は大波状の突起部で、楕円形隆帯の貼付文に沿って2条の角押文を施す。

51～58は沈線間に爪形文を施す土器である。51は円筒形を呈する深鉢形土器で、交互短沈線を施してモチーフが垂下する。52は斜状のモチーフで、交互に爪形文を配する。53は区画内を縦位で、区画外を横位に描く。54は弧状隆帯に沿った沈線文である。55、56は爪形文を配して三叉文を描く。57、58は弧状の沈線文を描く。

59、60は同一個体であろう。円筒形を呈する深鉢形土器で三角形、菱形の区画文を組み合わせ文様帯を構成する。区画内は爪形文に縁どられた三叉文、渦巻文を充填する。

61は交互短沈線による半肉彫状の隆帯が描かれ、勝坂Ⅱ式である。62は半裁竹管により描かれる複数列の隆帯である。63は矩形に蓮華文を配する。

64は阿玉台Ⅲ式土器の突起部である。扇状を呈し、中央に貫通孔を有する。正面は貫通孔を中心に襷状の隆帯が上下で対向する。突起から派生した隆帯が外側へ突出し、これに沿って爪形文が施される。

65は勝坂Ⅱ式の眼鏡状突起である。左右に円孔を配するが貫通しない。波頂部から太い隆帯が垂下し、これを起点に左右に区画文を配する。隆帯に沿って半裁竹管による連続した半円形の刺突文を施す。

66は阿玉台式の深鉢形土器の突起部で、端部に浅い刻みを有する。周縁は隆帯により肥厚する。

67～71は阿玉台Ⅱ式の土器である。67は口唇部直下に三角押文が横位に廻り、斜状のモチーフを描く。68は口唇直下に爪形文が施される。69は波状口縁を呈する。70は楕円形区画文内に沿って2条の角押文を描く。71は対向する弧状の隆帯が結節してY字状の懸垂文となる。

72は口唇部に刻みを施す。浅鉢形土器であろう。73は胴部に貼付された橋状把手である。胴部には横位の爪形文を施す。

74は口唇部から隆帯が垂下し、ここが起点となって楕円形区画文を構成する。区画内は有節沈線文を描く。75は口縁部と胴部を区画する断面三角形の隆帯が廻る。76は隆帯に単節縄文を施し、楕円形区画文を構成する。内部は爪形文が隆帯に沿って描き、連弧状のモチーフも描く。77は胴部片で、楕円形隆帯の横走する箇所角押文が沿う。78は同様に懸垂文が剣先文へ変化する箇所である。79は角押文による文様を描く。雲母片を多量に含むが勝坂Ⅰ式であろう。

80は胴部に貼付される隆帯による渦巻文で、角押文を施す。阿玉台Ⅱ式である。81は隆帯に沿って爪形文を描き、区画文内は有節沈線文を配する。阿玉台Ⅲ式である。82、83は隆帯に沿って爪形文を施す。83は三角押文が並走する。

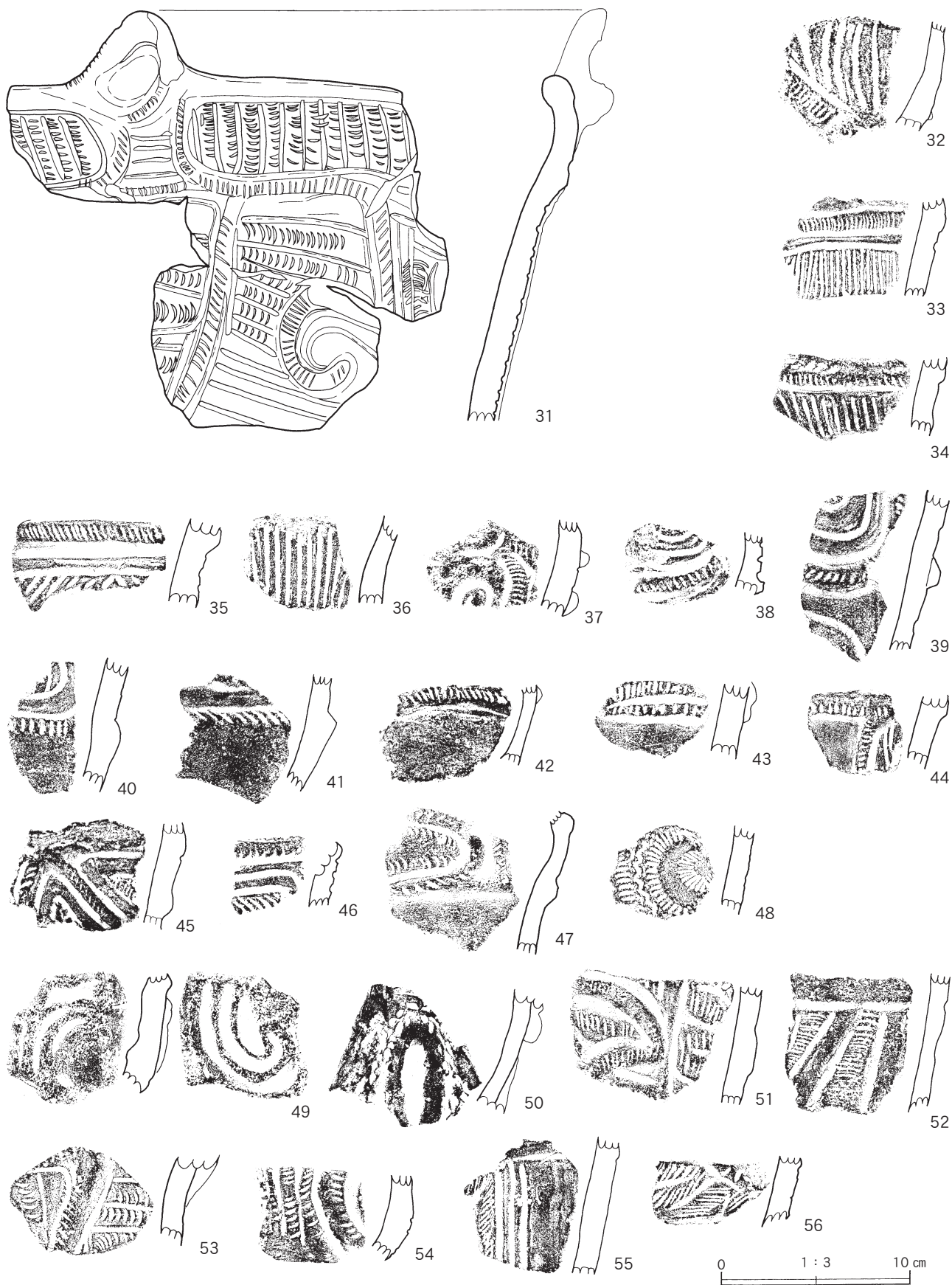
84は横位の隆帯に沿って集合沈線を描く。85は撚糸文を地文とする。86は底部付近で、断面三角形の懸垂文を貼付する。87は浅鉢形土器の底部片であろう。胎土には雲母片を多量に含む。

88～94はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部片である。88は2本隆帯による横S字状文の一部であろう。89、90は繋ぎ弧文で、いずれも結節点は突起状である。91は沈線による渦巻文の一部であろう。92は渦巻文から派生した隆帯と沈線が区画文を構成する。加曾利Ⅱ式である。93は渦巻文のモチーフを独立させて描く。94は波状口縁を呈する。

95～101は口縁部片である。95は2本隆帯が渦巻文を描く。96は連弧状のモチーフが渦巻文と結節する。



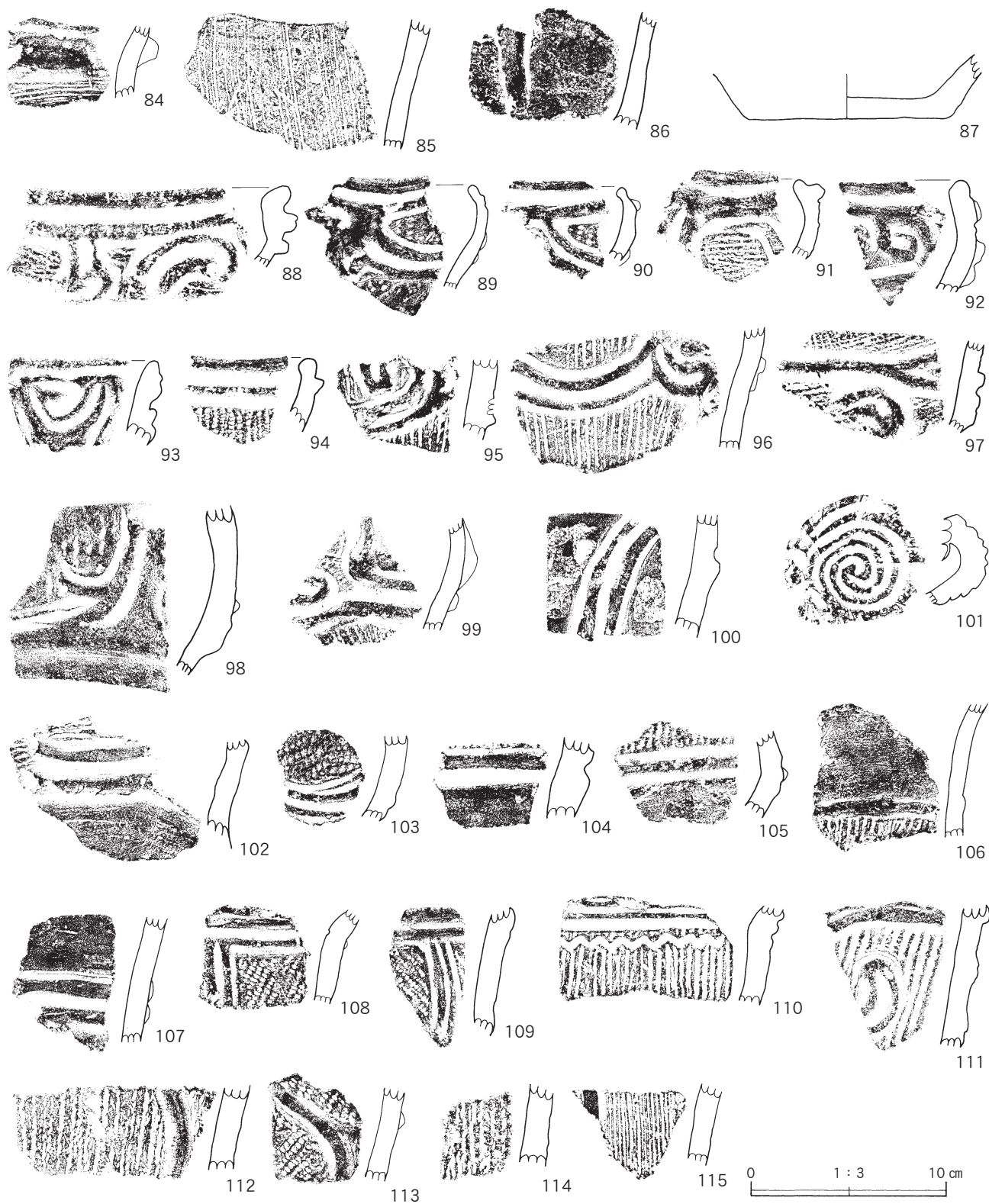
第215図 II層出土土器（1）



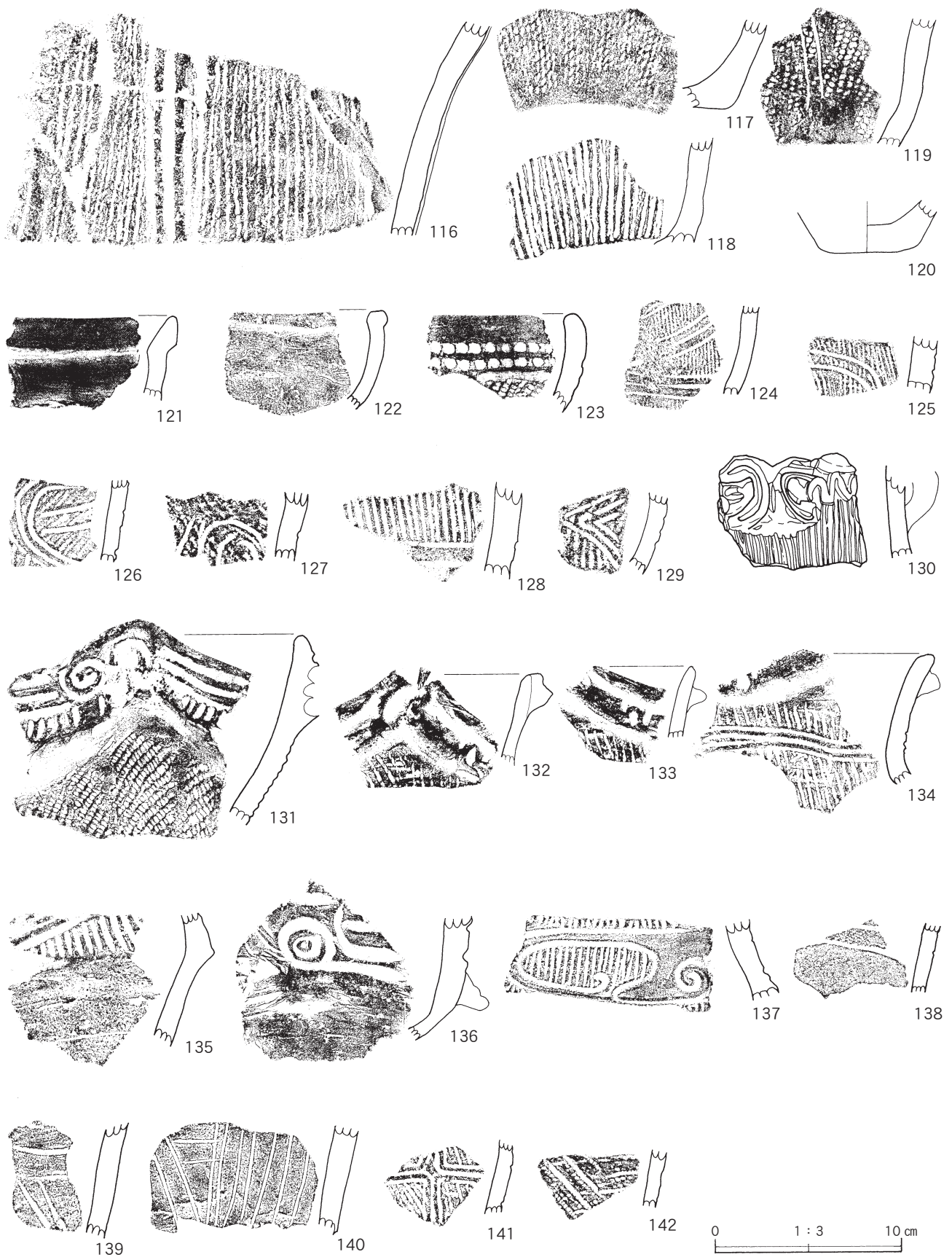
第216図 II層出土土器(2)



第217図 II層出土土器（3）



第218図 II層出土土器（4）



第219図 II層出土土器（5）

97は横位の隆帯が文様帯を上下に分離する。下半に渦巻文が貼付される。98は縦位の隆帯から弧状のモチーフが派生する。99は横位の隆帯が対向する。100は2本の隆帯による弧状のモチーフで、地文は無文である。101は密な沈線による渦巻文で、外側に突出し中空である。

102～107は頸部に無文帯をもつ土器である。102、103は胴部を区画する隆帯が弧状である。104は沈線直下が肥厚する。105、106は地文が撚糸文である。

108～117は胴部片である。108、109は平行沈線による懸垂文である。110は胴部上端に小波状沈線を横位に描く。111は懸垂文から派生した弧状の隆帯である。112、113は蛇行隆帯による懸垂文である。114は撚糸文による地文である。115の地文は条線である。116は平行隆帯と蛇行隆帯を交互に描く。

117～120は底部の資料である。117は底面直上に無文帯を有する。119は沈線による懸垂文が描かれる。120は底面の径が5.1cmと小さい。

121、122は浅鉢形土器である。121は口縁部が外屈して端部が先鋭する。122は内側に口縁を折り返し、端部は平坦である。

123～129は連弧文土器である。123は口縁部片で口唇直下に2列の円形刺突文が廻る。124は胴部文様帯を区画する横位の沈線を描く。125、126は弧状のモチーフに沈線文を充填する。127の平行沈線内は磨り消される。129は縦位の文様を剣先状に描く。

130は曽利系の土器で横位の橋状把手である。左右の貫通孔を有する。胴部には波状隆帯を貼付し、縦位の条線を施す。

131～133は波状口縁を呈する深鉢形土器で、いずれも中峠系である。132は口唇部が肥厚し、沈線による渦巻文と平行沈線、刻みを施す。口唇直下はLRの単節縄文である。

134は大木8b式系の土器である。波状口縁を呈し、口唇部直下には交互短沈線を施す隆帯が平行する。胴部の地文は撚糸文で、頸部に平行する3条の沈線が横位に廻る。波頂部は渦巻状に隆帯が入り組む。

135は浅鉢形土器で、口縁部文様帯直下に強い屈曲部をもつ。地文は集合沈線で、斜位の隆帯が文様を描く。

136は浅鉢形土器の胴部である。屈曲部が外側に鰓状に張り出す。文様は沈線で描き、同心円文と楕円形に区画文を配する。中峠系であろう。

137は曽利系の浅鉢形土器の胴部である。渦巻文から派生した沈線が楕円形区画文を描き、端部を蕨手状に描出する。区画内は集合沈線を充填する。

138～142は縄文後期の土器である。138～140は堀之内式土器である。138、139は区画文が描かれ、140は集合沈線による懸垂文が施される。141は加曾利BI式の胴部片である。沈線による方形の区画が描かれる。142は安行式の粗製土器である。

Ⅲ層出土土器（第220～228図）

1～4は縄文早期の土器である。1は撚糸文系の土器で、隆带状に肥厚する括れ部を有する。2、3は条痕文系の土器である。表裏に条線を施す。2は口唇部に刻みを有する。4は撚糸文系の土器で、口唇部に刻みを施す。

5～8は関山Ⅱ式の土器である。5、6は地文には結節縄文によるループ文を施す。

9は黒浜Ⅲ式の土器で、鋸歯状に付加条縄文を施す。

10～12は半裁竹管による爪形文を描く諸磯b式の土器である。いずれも爪形文間に斜状の刻みを充填させ、浮線文的に表現する。

13、14も諸磯b式の土器で、横位の集合沈線を施す。14は地文に撚糸文を施す。

15は口縁部片で、地文を条線として短隆帯と円形の貼付文を施す。

16～28は諸磯c式の土器である。16～18は口唇部が先鋭し、ここから隆帯が垂下する。地文は横位の条線である。いずれも口唇部直下の裏面に短隆帯が連続して垂下する。16は円形の貼付文が口縁部をまたいでいる。19～21は短隆帯、円形の貼付文を地文上に施す。地文は縦位の条線である。22はやや楕円形の貼付文で格子状に施す。23は円形の貼付文である。25～27は結節貼付文を施す。25は弧状に、26は斜状に施す。28は集合沈線文である。

29～32は勝坂Ⅲ式の突起部である。29は山形状突起で、口縁部には眼鏡状の突起を貼付し、左右方向の貫通孔を有する。波頂部直下の右側縁には円孔を施し、三叉文を配する。口縁部は爪形文による区画文を施す。30は表面に円孔を配し、波頂には沈線による三叉文を描く。右側縁には刻みを有する隆帯が垂下して区画文を構成し、三叉文を充填する。31は表裏ともに周縁に爪形文を施し、三叉文を充填する。32は弧状の突起部である。表面には貫通孔の周辺に沈線文を描き、裏面には貫通孔と並んで円孔を配する。

33は口縁部に貼付される突起部である。中空であり、蛇行する隆帯が施文された後に刺突文を施す。34は左向きの突起部で、口唇部直下に円孔を施す。

35は平口縁で内湾する器形である。口縁部に施した円形の貼付文を起点とし、刻みのある隆帯を放射状に派生して区画文を構成する。区画内は渦巻文や爪形文、集合沈線を充填する。36は口唇部直下から派生する隆帯により楕円形区画文を描く。区画内は粗い角押文と集合沈線である。37は口唇部に蜷局状の突起を配する。突起部から螺旋形に垂下した隆帯で口唇部が肥厚し、口縁部の懸垂文に変化する。

38は口唇部直下に貼付された円形貼付文がやや突起状である。口唇直下から垂下する半円形の隆帯が1本に変化する。39は口唇部直下に蛇行する刻みのある隆帯を貼付する。40は波状口縁を呈し、円形の突起を貼付する。突起から弧状の隆帯が垂下し、区画文を構成する。41は口唇部直下から隆帯が垂下して区画文を描く。42、43は円形の貼付文を起点にして隆帯が放射状に派生する。

44～56は楕円形区画文を有する。44は鰓状に張り出す隆帯に刻みが加えられ、区画内は爪形文と横位の小波状沈線を2条施す。45～52は区画内に集合沈線を充填する。49は楕円形横帯文間が無文である。50は隆帯上の刻みが器面まで突出して文様を描く。51は隆帯が鰓状に肥厚する。52は3本隆帯による区画文である。54は連続した三角押文を施す。勝坂Ⅱ式に比定される。55は広い無文帯を有し、直下にモチーフを描く。56は曾利系の土器で、刻みをもつ隆帯が弧状のモチーフを描く。

57は円筒形を呈する深鉢形土器である。垂下する隆帯には綾杉状の刻みを施し、文様帯を縦位に区画する。左側には人体表現にみられる3本指状のモチーフを配する。

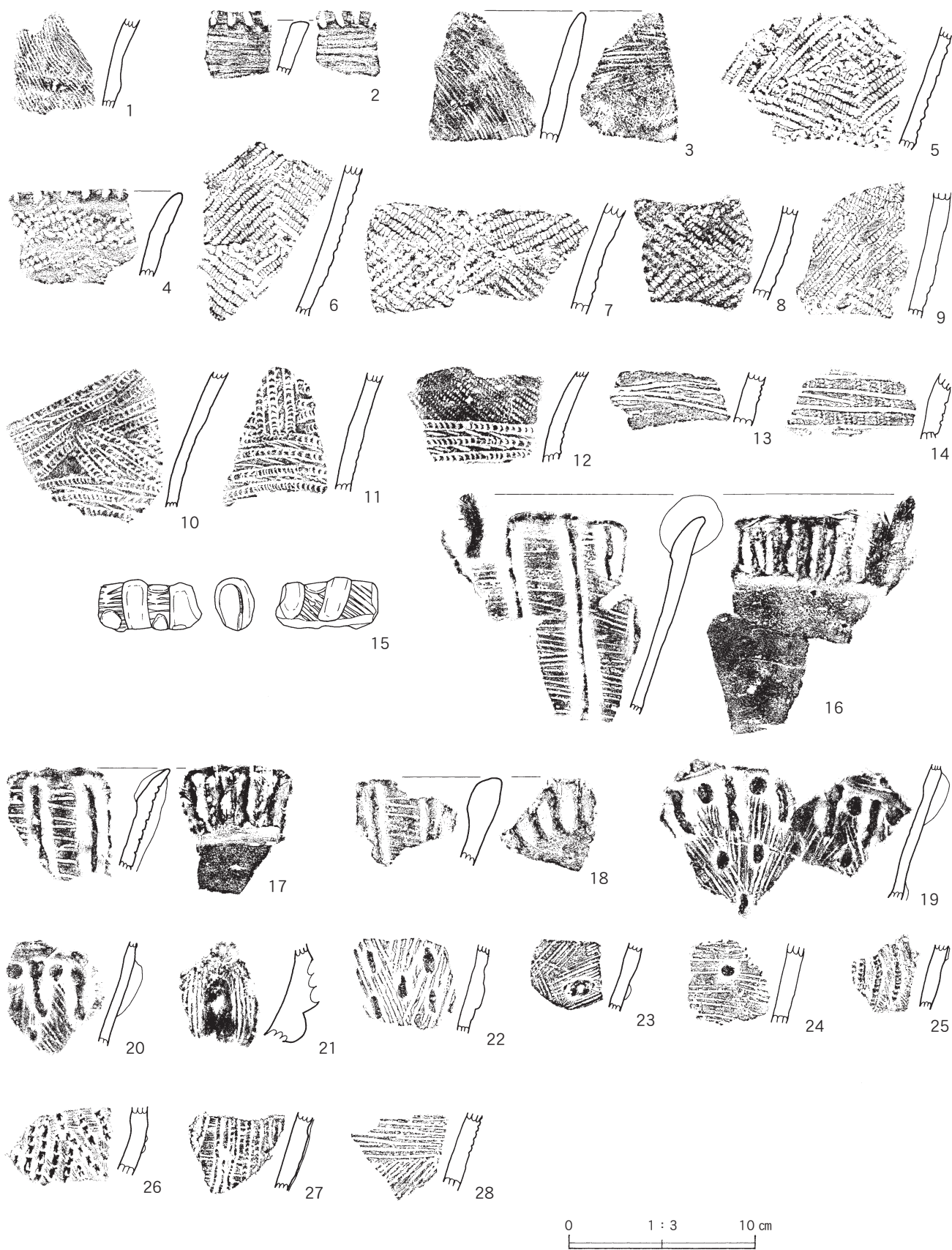
58～61は刻みを有する隆帯により描かれる区画文である。58は三叉文を充填する。59の懸垂文は交互の短沈線を施す。61は充填した集合沈線間に交互短沈線を配する。

62は沈線で区画し爪形文と刻みをもつ隆帯が入り組み状である。63は円形の区画文内に同心円状にモチーフを配している。64は隆帯を蜷局状に施文して突出する。65は胴部へ左方向きに貼付した突起部で、渦巻状である。

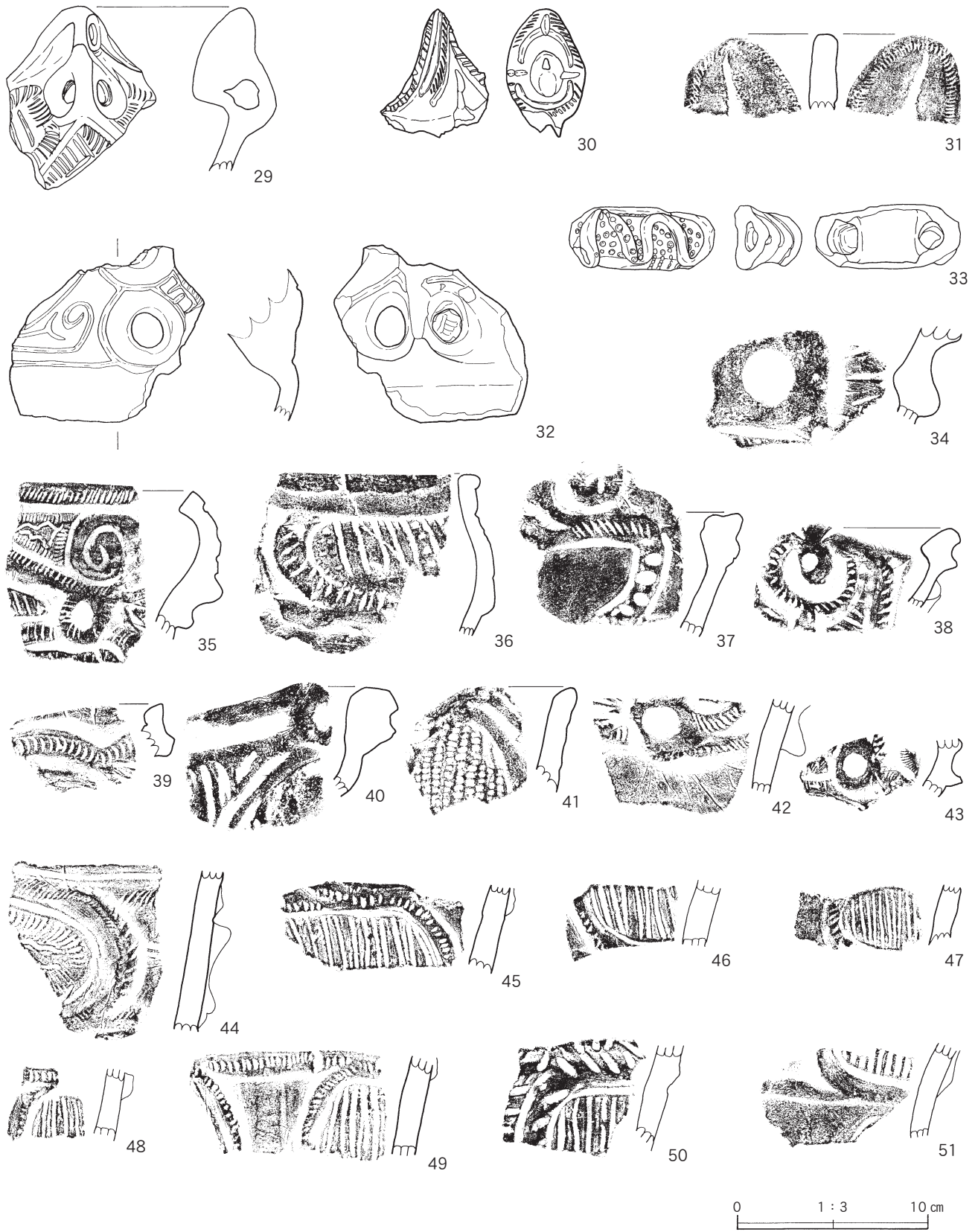
66～69は隆帯に沿って爪形文を施す。67は三角押文を爪形文に沿って施す。68は横位の楕円形隆帯を貼付し、爪形文を密に施す。

70～76は矩形の区画文を有する。70は区画内に蓮華文を施す。71は横長の区画文で、内部は縦位の沈線と円形の刺突文を施す。74は沈線と隆帯による区画文が対向する。75は下部の隆帯が鰓状に張り出す。

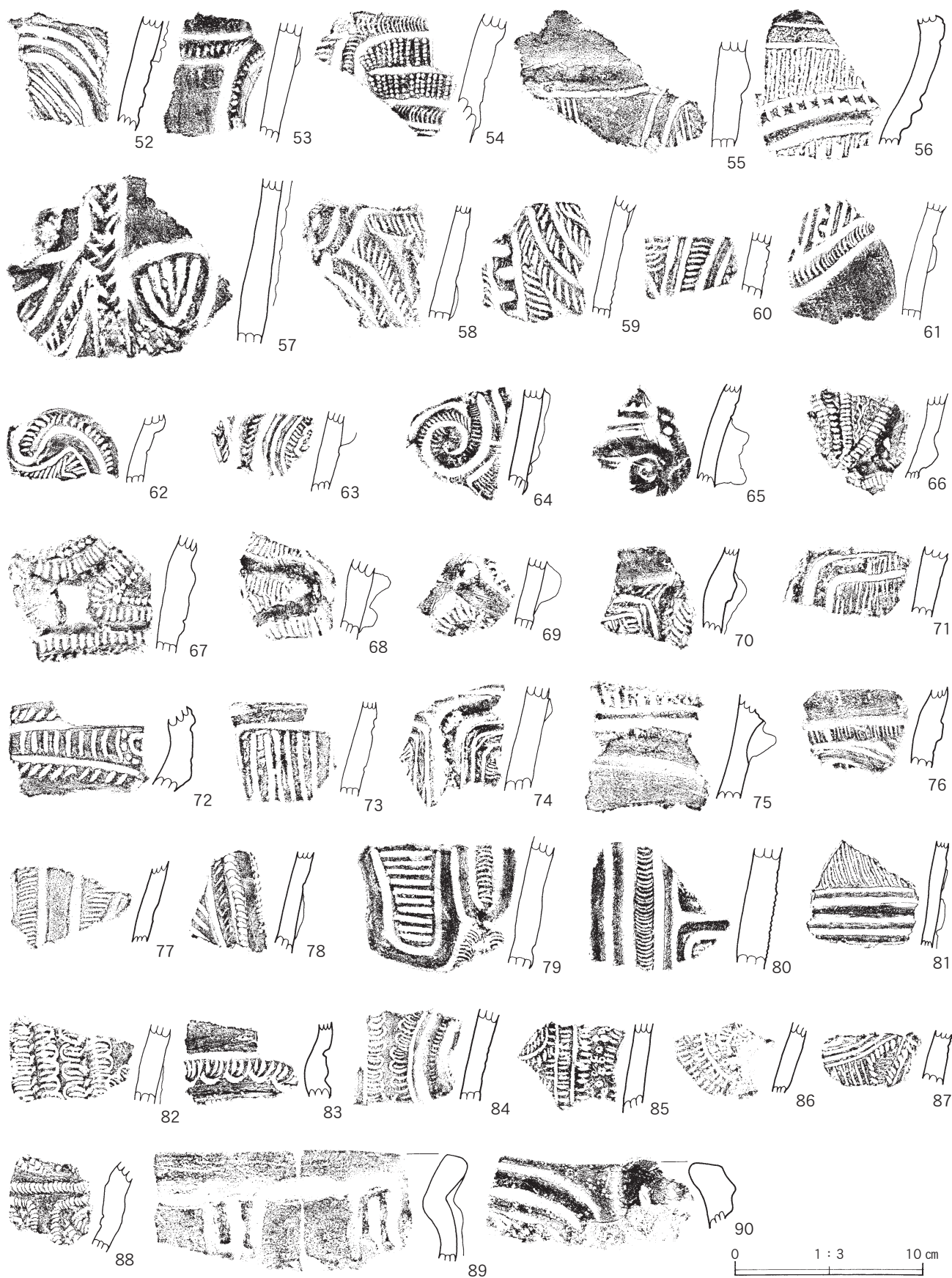
77～81は縦位の区画文により器面の文様帯を構成する土器である。77は平行沈線が垂下する。78は隆帯間



第220図 Ⅲ層出土土器（1）



第221図 Ⅲ層出土土器（2）



第222図 Ⅲ層出土土器（3）

に三角押文を施す。79は集合沈線を充填する矩形の区画文と楕円形の懸垂文を組み合わせる。80は半裁竹管による縦位の沈線と隆帯で縦位の区画文を描く。

82～84は蓮華文を描く土器である。82は縦位の微隆帯に沿って爪形文を配し、これに半裁竹管で弧状の刺突を加えて複数列の蓮華文とする。83は肥厚した口縁部直下に蓮華文を施す。84は蓮華文を縦位の区画文に沿って描く。

85、86は沈線と円形の刺突文で構成する小型の土器である。それぞれ文様間に爪形文を施す。

87は沈線文を主体にモチーフを描き、爪形文による区画文を施す。88は爪形文により対向する矩形の区画文を描き、内部にも爪形文を充填する。

89～91は浅鉢形土器である。89は口縁部が外屈し、胴部上半が最大径となる。屈曲部から平行隆帯、逆U字状の隆帯が胴部へ垂下する。90は内湾する口縁部で、口唇部を平坦に仕上げる。口唇直下に2本隆帯による弧状のモチーフを施す。91は口縁部直下の区画文内に横位の沈線と交互刺突を伴う隆帯を平行して充填する。

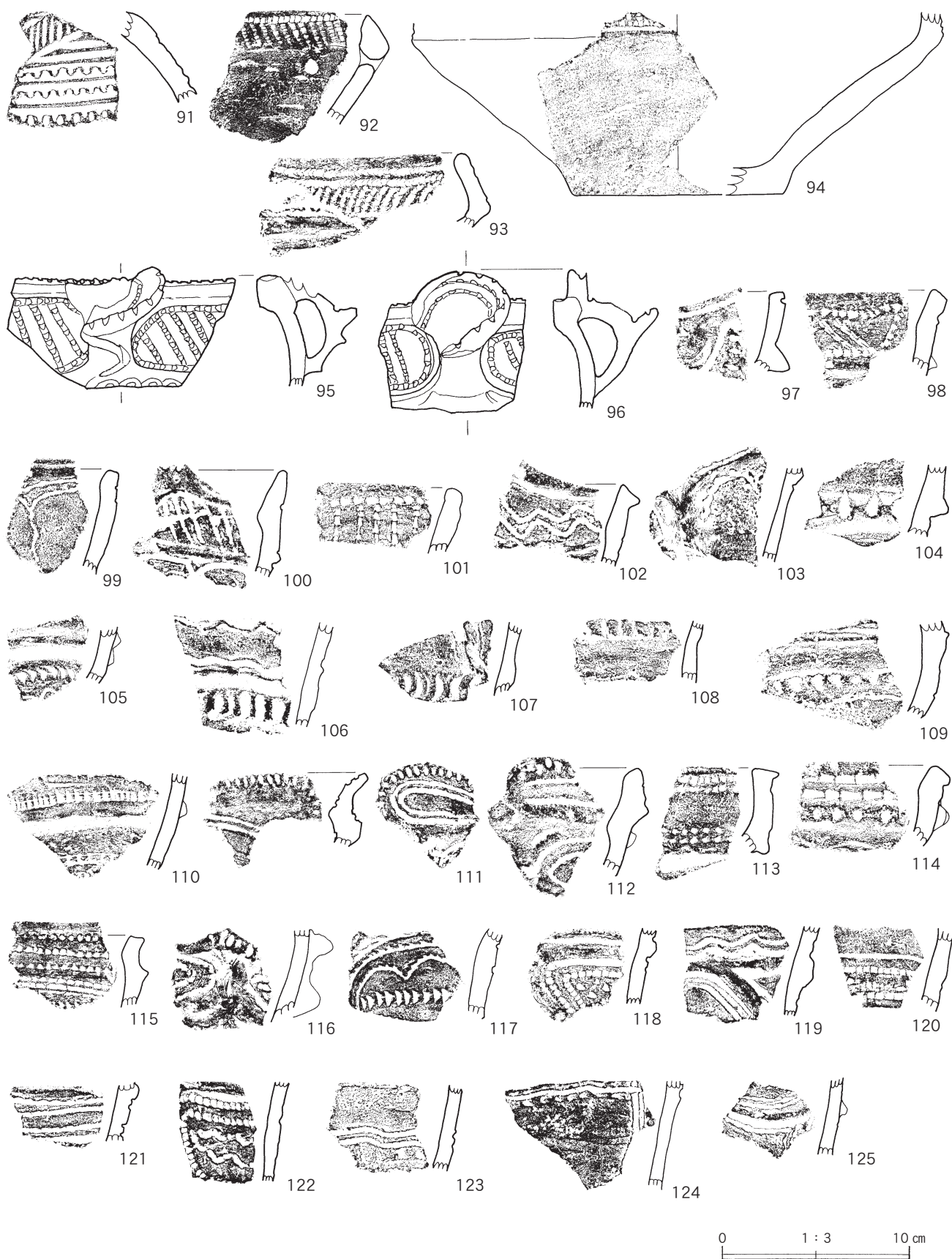
92～94は勝坂Ⅰ式の浅鉢形土器である。92は口唇直下に横位の角押文が廻り、口縁部には斜位の角押文を施す。胴部に補修孔を内側から外側へ穿つ。93は三角押文を口縁部に施す。口唇部直下に2条、胴部の屈曲部直上に1条が廻り、内部に斜位の三角押文を充填する。94は底部から胴部片である。立ち上がりはやや外反しながら屈曲部に至り、内屈する器形である。口縁部文様帯は屈曲部に沈線が廻り、その直上の角押文を縦位に施し、角押文間の下端に刺突文を横位に施文する。

95～110は阿玉台Ⅰb式の土器である。95、96は平口縁から橋状に外側へ突出する突起部である。いずれも円形の刻みを伴う隆帯を貼付する。95は突起部から蛇行状の隆帯が垂下する。土器の口唇部には刻みが施されて廻る。口縁部の区画文は角押文により楕円形に区画し、内部を斜行の区画文で充填する。口縁部文様帯の下端には小波状の沈線を横位に施文する。

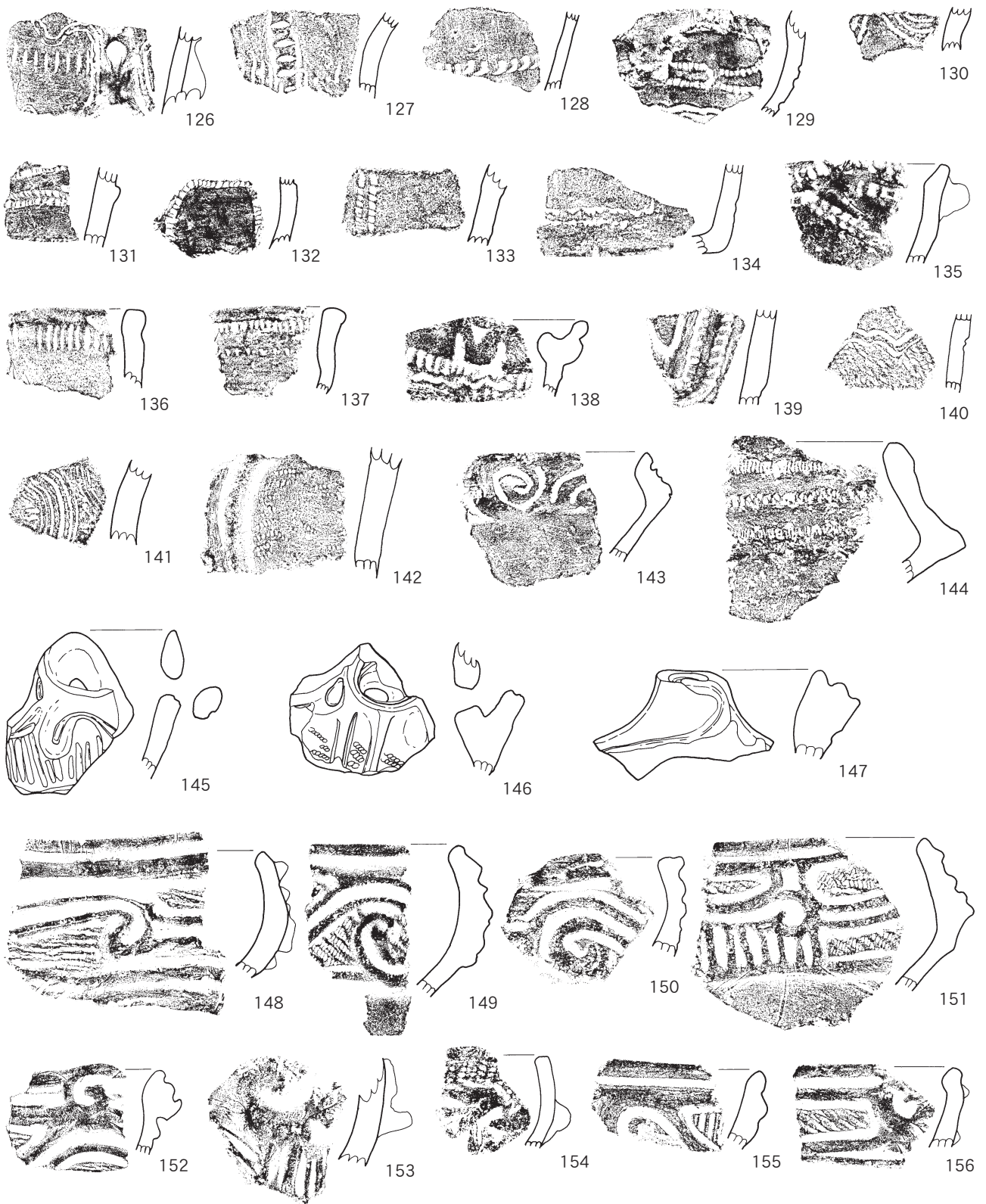
97は波状口縁を呈する。口唇直下に刻みを有する隆帯に沿って有節沈線を廻らせる。98は角押文による方形の区画内に斜位の角押文を並走して施す。99は有節沈線文がY字状に垂下する。100は山形状の突起部で、端部に刻みを加える。口唇部の直下は楕円形の区画文で、有節沈線により描く。101は緩やかな波状を呈する口縁部である。横位の角押文と縦位の角押文を施す。

102は波状口縁を呈する。口唇部は外側に突出し、直下に1条の角押文が廻る。口縁部には角押文による2条の小波状文を施す。103は隆帯が左右から結節してY字状の垂下文を構成する。隆帯に沿って角押文を1条施す。104は横位の隆帯に太い刻みを施し、105は横位の隆帯に沿って角押文を施す。106は平行する2本の隆帯が区画文を描く。区画内は角押文が沿い、小波状の沈線を施す。107は刻目文が垂下する微隆帯が直交する。108は隆帯に沿って小波状の沈線を施し、下部には刻目文を横位に施文する。109は屈曲部の輪積痕に刻目文を施す。110は横位の微隆帯に沿って角押文を施し、輪積痕を覆うように刻目文を施す。

111～135は阿玉台Ⅱ式の土器である。111、112は扇状の突起部である。いずれも端部に刻みを加える。111は突起に沿って2条の楕円形に有節沈線文を施す。112は突起部から蛇行して垂下する隆帯に沿い、2条に有節沈線文を施文する。113～116は口唇部がやや外側に突出し、端部は平坦である。口縁部には平行して隆帯が廻る。113は2条の角押文が沿い、114は横位の隆帯に押圧を加える。115は口唇部直下に刻みを加え、口縁部は角押文が複数列廻る。116は隆帯による区画文を描いたと想定される。117は隆帯には2条の角押文を施し、内部には連弧状の有節沈線文、三角押文を描く。118は対向する楕円形区画文で、2条の有節沈線文を区画内に沿って施し、隆帯による区画文内に角押文と刺突文を充填する。119は土器の頸部付近である。横位に2条の小波状沈線文が廻り、隆帯に沿って2条の沈線を施す。120～122は横位に複数列施した有節沈

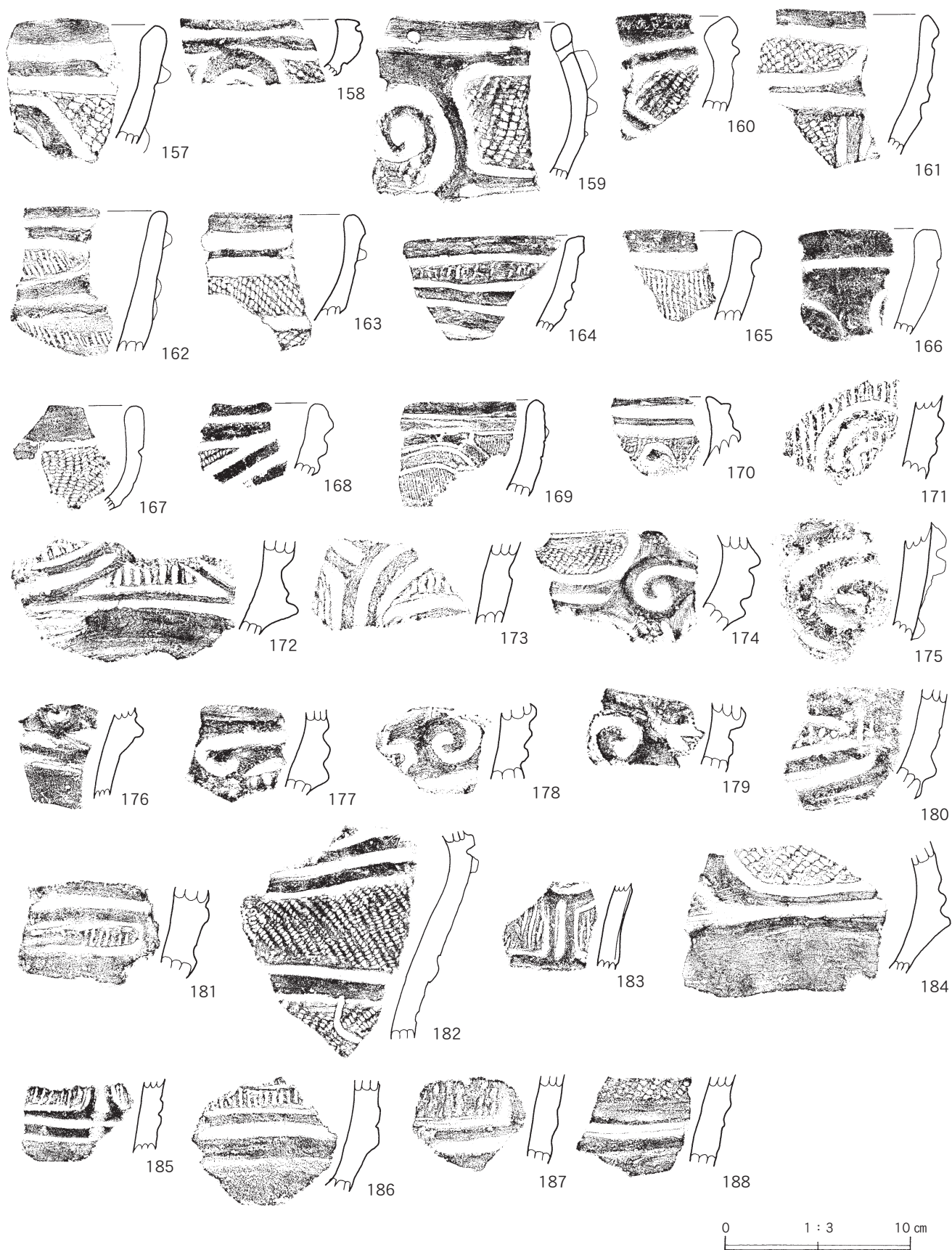


第223図 Ⅲ層出土土器（4）



0 1 : 3 10 cm

第224図 Ⅲ層出土土器（5）



第225図 Ⅲ層出土土器（6）

線文である。122は角押文による区画文で、内部に小波状の角押文を2条施す。123は2条の小波状沈線文である。124は胴部片で平行沈線による懸垂文を描く。125は蛇行する隆帯に沿って有節沈線文を施す。126は押圧を加えた懸垂文に沿って平行沈線を施し、横位に刻目文を描く。127は刻みを伴う隆帯が垂下し、沈線を周囲に施す。128は胴部に施した刻目文である。129は横位の角押文が楕円形に収束し、わずかな間隔を空けて再び角押文を描く。130は弧状に施した複数列の有節沈線文である。131は隆帯に沿って角押文を施す。132は連弧状の角押文が描かれる。133、134は底部付近である。133は並走して垂下する角押文である。134は横走する角押し文である。

135～139は阿玉台Ⅲ式の土器である。135は口唇直下と隆帯に沿って爪形文を施す。136、137は肥厚した口唇直下に爪形文を施す。138は波状口縁を呈し、端部の断面形は先鋭する。口唇部直下に蛇行する隆帯を貼付し、これに沿って爪形文を施す。裏面には円孔を配す。139は隆帯が区画文を描き、爪形文が沿う。

140～142は阿玉台Ⅳ式土器である。140は地文上に横位の小波状沈線文を施す。141は集合沈線による弧状のモチーフが描かれる。142は胴部片で、地文にRLの単節縄文を粗く施し弧状の隆帯を垂下する。

143は阿玉台Ⅰb式の浅鉢形土器である。口縁部には鰹状の隆帯を貼付し、角押文による渦巻文と平行する弧状文を施す。

144は口縁部がやや外反しながら立ち上がる浅鉢形土器である。口唇部直下、胴部屈曲部に沿って爪形文が施され、中央も爪形文が並走する。

145～147は加曾利ⅠE式の突起部である。145は中空突起で山形状を呈する。波頂部から螺旋状に隆帯が垂下し、口縁部文様帯に結合する。左側面、裏面、下部に貫通孔を有する。146は波頂部を欠くが、中空を呈する突起である。沈線が伴う隆帯が突起から垂下し、口縁部文様帯へ変移して懸垂文が派生する。左側縁と裏面に貫通孔を配する。147は波頂部が平坦で、渦巻文を描く。ここから沈線が蛇行して垂下し、口唇部のモチーフとなる。

148～170はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片である。148～151は2本隆帯により文様を描く土器である。148は横位のS字状文から平行する隆帯が派生する。149は隆帯が上部から大きく回り込んで渦巻文を描出する。150は渦巻文から右方に平行する隆帯が派生する。151は蕨手文を伴う2本隆帯が口縁部文様帯を上下に二分する。一部は縦位の短隆帯で頸部と接続する。

152～156は繋ぎ弧文のモチーフを有する土器である。152は渦巻文がやや口唇部に突出して突起状である。153は波状口縁を呈し、渦巻文の突起から隆帯を垂下する。154は隆帯の結節部が入り組み状である。155は渦巻文を平面的に描く。156は蕨手文が右方を向いて外側に突出し、接続する隆帯が直線状である。

157、158は区画文内に渦巻文を配する。159は楕円形の区画文と渦巻文を描く。

160～168は区画文をもつ口縁部片である。166は半肉彫状の隆帯が楕円形区画文を描く。167は沈線による区画文で、口唇部直下には無文帯を有する。

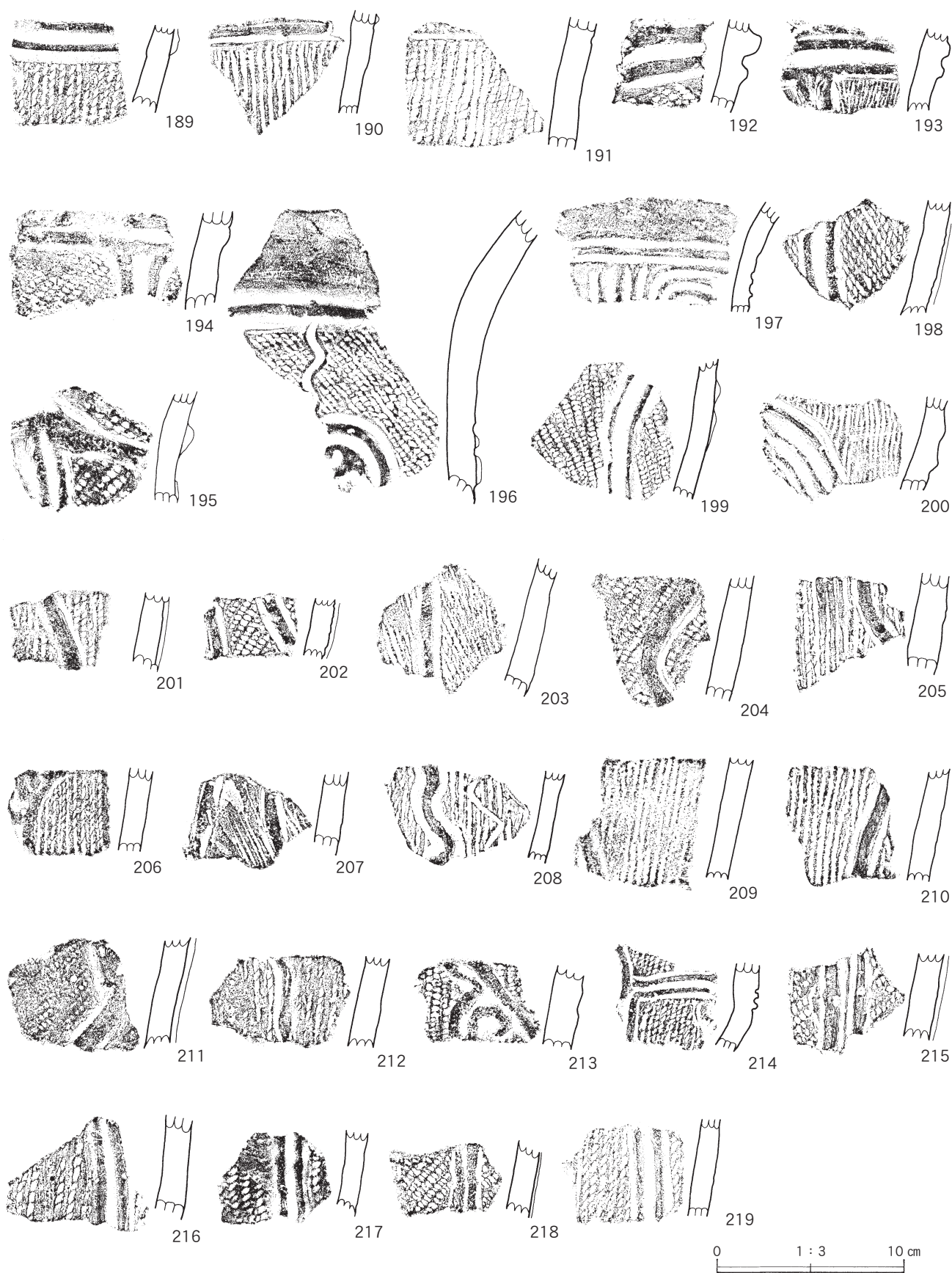
169、170は隆帯の剥離によりモチーフを喪失するが、169は2本隆帯による文様を描き、170は沈線による繋ぎ弧文であろう。

171～173は口縁部付近である。171は2本隆帯による渦巻文である。172は頸部を区画する隆帯が外側へ突出し、ここから2本隆帯が派生する。

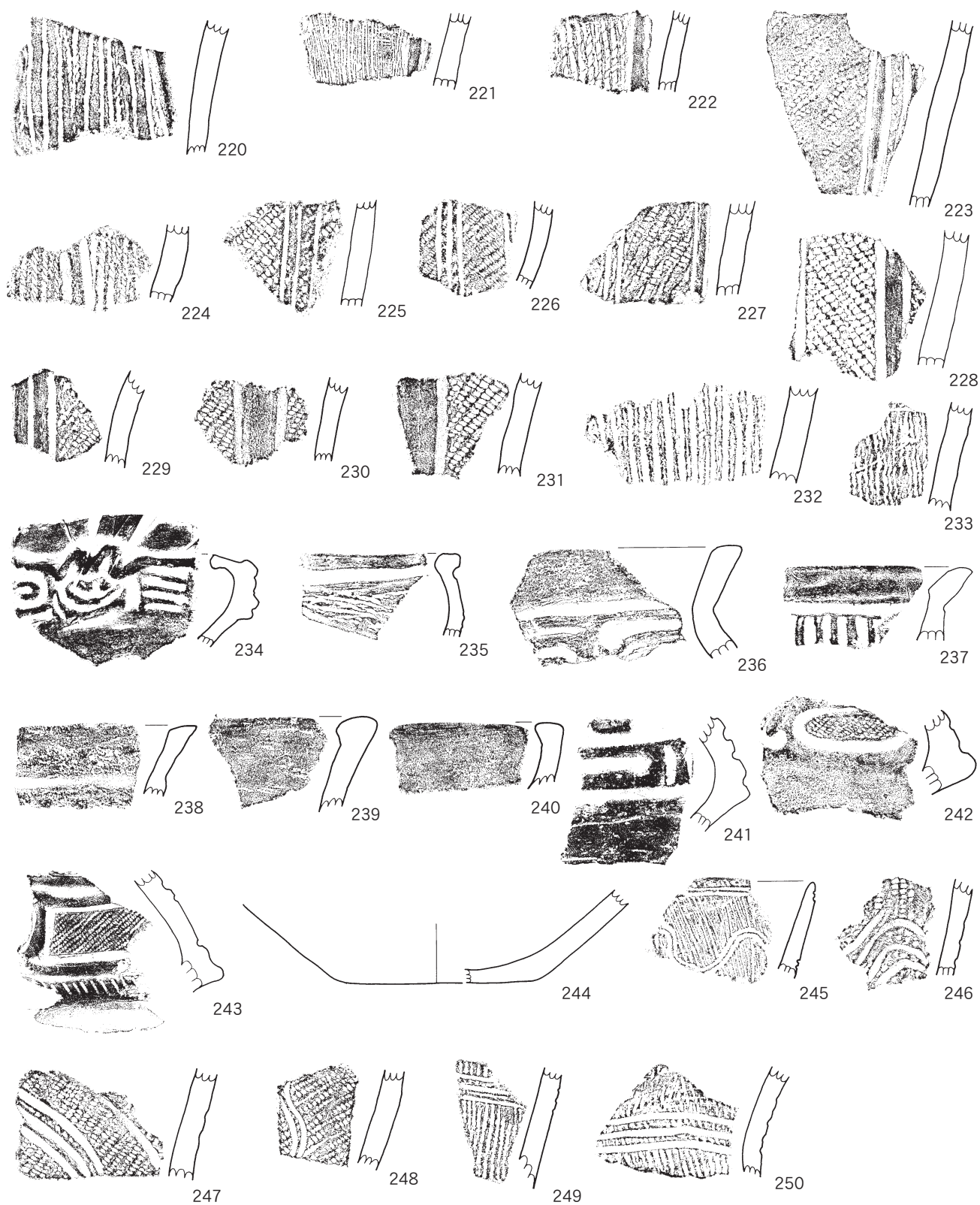
174～177は渦巻文を口縁部文様帯の区画文内に描く。174は渦巻文から隆帯が四方に派生する。176は渦巻文直下に頸部無文帯を配する。177は横位のS字状文である。

178、179は渦巻文が区画文を構成する隆帯から派生する。

180～183は口縁部文様帯に描かれた区画文である。182は口縁部直下に蛇行する懸垂文を描く。183は縦位



第226図 Ⅲ層出土土器（7）



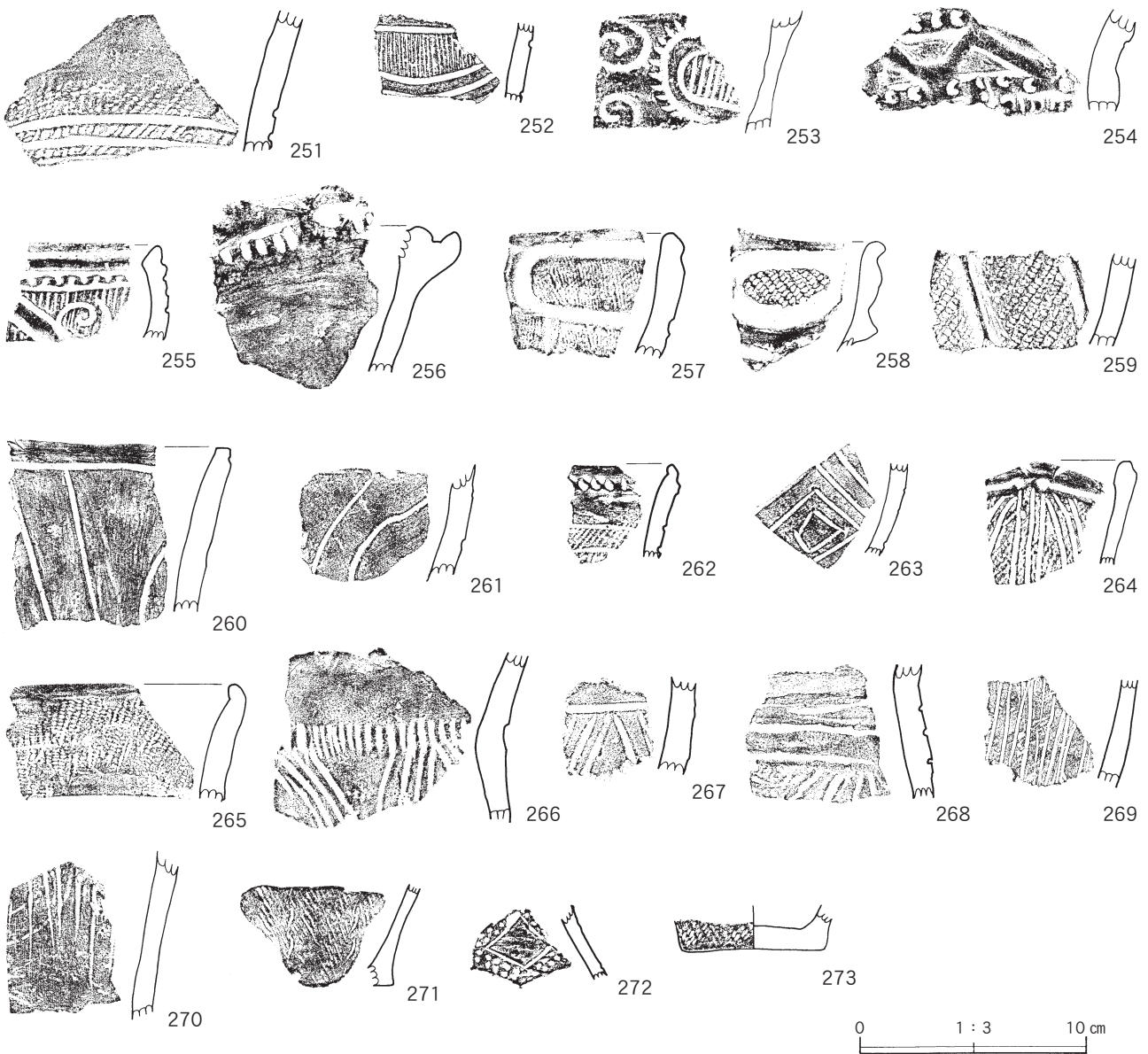
第227図 Ⅲ層出土土器（8）

の隆帯により区画文が対向する。

184～188は口縁部文様帯と頸部無文帯が隆帯により画される資料である。184は屈曲部の隆帯が肥厚し、外側へ庇状となる。

189～196は頸部直下の胴部文様帯である。189～191は縦位の撚糸文が地文である。192の地文は斜位の単節縄文である。193～195は平行する隆帯が懸垂文を描く。196は頸部無文帯の直下に1条の隆帯が横位に廻り、沈線による蛇行懸垂文を描き、途中で隆帯による渦巻文を結節する。197は頸部無文帯の直下に2条の沈線が廻り、胴部は集合沈線による懸垂文と矩形の沈線文を充填する。

198～233は胴部片である。198～200は複数列の隆帯による蛇行懸垂文を描く。201～212は単隆帯による蛇行懸垂文を描く。206は隆帯から横位に文様が派生する。207は懸垂文と蛇行懸垂文を交互に描く。208は沈



第228図 Ⅲ層出土土器（9）

線による鋸歯状のモチーフを平行して描く。213は隆帯から途中で渦巻文が派生する。214は胴部を横位に区画する隆帯を描き、弧状のモチーフが結節する。215～224は隆帯による懸垂文を描く。215は隆帯間に地文が残る。218は隆帯上に沈線を施して2本の表現とする。221は地文に条線を施す。223は隆帯間が広く、裾部のみが沈線により地文を磨り消す。224は幅の広い沈線を垂下し、中央を隆帯状としている。225～227は平行沈線により懸垂文を描く。

228、229は沈線間を磨り消して懸垂文を描く。230、231は加曾利 EⅢ式の胴部で、幅の広い磨消懸垂文を描く。232、233は胴部の撚糸文による地文である。

234～244は浅鉢形土器である。234は口唇部が強く内屈し、直下の文様帯は半肉彫状に表現する。

235は口唇部の直下に幅広い沈線が廻り、胴部には斜位の撚糸文を配する。236は頸部で強く屈曲する器形である。頸部文様帯は横位の沈線文を描く。237は口縁部直下に縦位の集合沈線を配す。238～240は無文である。238は口縁部が強く外反する器形である。239は内側に口唇部が突出する。240は口唇部が平坦で、わずかに内側が沈線状である。241は胴部に横位の区画文を描き、縦位の平行する短沈線で区切られる。区画内の横走沈線の端部が丸く肥厚する。242は胴部に楕円形区画文を描き、渦巻文を施す。243は方形の区画文である。区画の端部が弧状にはねて渦巻文へ展開するようである。胴部の屈曲部は隆帯が肥厚し、刻みを施す。244は底部片で、直線的に外傾して立ち上がる。

245～252は連弧文土器である。245は口唇部直下に平行する沈線が廻り、胴部には連弧文を平行沈線で描く。246、247は集合沈線による施文である。248は縦位の連弧文である。249～251は胴部中位に描かれる横位の沈線文である。252の地文は細かい条線で、連弧文、胴部区画文内を磨り消す。

253は曾利系の浅鉢形土器である。楕円形区画文内は条線を充填し、周囲に刻みを加え、対向する渦巻文を描く。254は深鉢形土器の頸部で鋸歯状の隆帯を施す。上下に貼付する隆帯には半裁竹管の刺突列を加える。

255、256は中峠系の土器である。255は平縁で口唇部直下に隆帯と交互刺突文が横走する。器面は細かい撚糸文を施し、沈線による渦巻文を描き、斜行する隆帯を貼付する。256は波状を呈する口縁部で、口唇部は沈線とこれに直行するように単沈線を加え、波頂部は蕨手状の文様を描いて突起状である。

257～259は加曾利 EⅢ式の土器である。257は沈線による楕円形区画文が描かれ、直下には懸垂文を施す。258は口縁部片で、隆帯による楕円形区画文の右端部が跳ね上がる。259は胴部片で微隆帯による懸垂文を貼付する。

260、261は称名寺Ⅱ式土器である。260は口唇部直下に沈線が廻り、ここから縦位の平行沈線が垂下し、モチーフを展開する。

262～273は堀之内式土器である。262は深鉢形土器の口縁部片で、口唇部の直下内側は屈曲部が沈線状で、外側は隆帯上に刺突文を施し、胴部は帯縄文を施す。263は菱形状の沈線文を描く。264は波状口縁を呈し、口唇部直下に刺突文を施し、これを起点として沈線を廻らす。また、縦位に集合沈線により対向する弧状のモチーフと懸垂文を描く。265は深鉢形土器で地文のみを施す。266～268は粗製の深鉢形土器の頸部片である。集合沈線による弧状の懸垂文を対向して描く。269、270は器面に描かれた集合沈線である。271は深鉢形土器の底部付近の資料で、やや外反しながら立ち上がる。272は注口土器の胴部片で、菱形の文様に刺突文を充填する。273は底部片である。